サンシャイン３１１

Ｊ．Ｉ．Ａ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サンシャイン３１１

【Ｎコード】
Ｎ２６４２Ｚ

【作者名】
Ｊ．Ｉ．Ａ

【あらすじ】
魔法文明の発達した異世界、その市民革命のまっただ中の時代。不思議な植物を拾った自警団員が異能に目覚め、《白の王》と名乗る魔族から街を守る。

エア（夏至）の2日、晴れ（前書き）

現代風の魔法文明を描く上で、封建制度が無くなる市民革命の過程が必要だと思ったので書いてみた。

あくまでエンターテイメント作品なので思想は日和見主義的、悪党と戦う俺ＴＳＵＥＥＥＥＥ展開が基本なので注意。

エア（夏至）の2日、晴れ

ある夏の夜、テン＝ディルコンタルの上空を一匹の妖精が飛んでいた。

本名アルシーノ＝マクモニティ、通称シーノ。手のひらほどの体に昆虫の羽根を持つ、フェアリーと呼ばれる種族だ。

ときおり振り返っては、絶え間なく振動し続ける羽根越しに背後の様子を確認していた。

まだ追っ手は来ていない。彼女の二対の薄い羽根の向こうには、人間の街の明かりが延々と続いている。

大森林はとっくに地平線の向こうに遠のき、青い雲が天空と地上の間をさまよっているばかりである。

妖精族は月の満ち欠けによって魔力が著しく増減する。今日のような満月の夜でなければ、あの森から脱出することもできなかっただろう。

両手でぎゅっと包み込んだ宝物を、あふれ出る光を遮断するように力強く胸に押し付けた。

だがどんなに力強く押さえ込んだところで、強い光は彼女の手のひらの血管を透かすようにどくどくとあふれてくる。

「落ち着け、落ち着け……」

さしもの森の番人たちも、人間の領土まで逃げれば追ってこられるはずがない。

だが、それでも焦燥ばかりが彼女の胸を焦がしていた。

早くしないと、今にも手の中の『こいつ』が成長してしまいそうだった。実際、押さえ込んでいる手にはそれがむくむくと成長する反発力を感じていた。

硬い殻がぴりっと裂ける音や、きゅううという鬱屈されたガスかなにかが隙間から漏れ出すような音も聞こえている。

いまにも彼女の繊毛のような細い指を押しのけ、外に飛び出そう

としているようであった。
「あわわっ、待てっ、待て！　いまは成長するな、もうちょっとだから待て！」
シーノがいくら呼びかけたところで、その宝物に耳はついていない。
それどころか眼も鼻も口もついていない、ただの植物の種である。
けれどもこの植物には植物らしからぬ意思を感じる。まるで彼女から逃げようと抵抗しているような気さえした。
いや、そんなはずはない、落ち着け、手の汗を吸って成長が早まっただけだ。
そんな事を考えながら、背筋がつりそうになるくらい羽根を振り続けていると、ふいに彼女を照らしていた月明かりが途絶えた。
雲に遮断されたのではない、塔だ。《魔法使いの塔》が格子戸のように均一に並び、彼女に向かって強い影を投げかけていた。
その周囲に集まっている街の明かりは、計画的な精密さで配置された都市のものに変わっていた。
大都市の中に、八角形を描く巨大水路が二重三重に横たわっている。それらは闇夜に浮かび上がるほどくっきりと暗い直線を地上に描き、水底に並べられた青白い光を放つ魔石が怪しげな光の呪文を描いていた。
魔術によって栄えた中世の大国。魔法大国（ゼフス）だ。
中央の山に鎮座する城が月明かりにぼんやりと浮かんでいた。ボルゼン＝ゼフス城。白鳥城の別称を持つ東部アーディナルでも最大級の王城だった。
来た。とうとうゼフスまで逃げおおせた。よしあともう少し、とシーノが油断したところだった。
顔を手元に向けた瞬間、手の中央あたりから縮められた双葉が勢いよく飛び出して、彼女の顎をがつんと一発なぐりつけた。
「ぐわぁっ！」
不意打ちを食らったシーノは大げさに仰け反って、そのまま空を

くるりと宙返りした。
幸いにも葉が柔らかかったので痛みはなかったが、さすが森の精サテモの至宝、植物のくせに抵抗を見せるとはじつに生意気である。
なんとか落とさずにしっかりと手に握っていた植物を睨みつけて、シーノはおやっと目をむいた。
彼女が握っていたのは、種を覆っていた茶色い薄皮だけだったのだ。さっき双葉が生えたはずの中身が無い。
シーノはぴたりと空中に静止すると、延々と広がる街明かりを見下ろして、蒼白になった。
この状態で考えられる答えは一つ。あれだ、宙返りした拍子に中身がポロリと。
「ど、ど、ど、どうしよう……」
これはまずい。非常にまずい。探せるか。この街の中を。丸一日も経てば、あの植物は完全にこの地に根付いてしまうはずだ。
それどころか下手をすると、この街が一日も持たずに消滅しているかもしれない。

＊＊＊

謎の植物が落下したのは、《サンシャイン》という名の小さな通りであった。
通りには平凡な民家が軒を連ね、角に立っているパン屋の石壁に《サンシャイン通り３１１番地》という看板が掲げてあるのが目印だ。
朝にここを通りかかった旅人は、焼きたてのパンの香りと共にこの地名を覚えるのであろう。
妖精の落し物を最初に見つけたのは、通りをのっそのっそと歩いていた熊のような自警団の男であった。
親分、サンシャインの旦那、いろいろな呼び名を持っているが、いちおうロブロというのが本名だ。苗字はない。

ここエア地区はゼフスでも都心からずいぶん離れているため、王都で主流の自警団のスタイル、ヘルメットにサーベルと言った当世風の装備をしている訳ではなく、どちらかというと森番とか狩人といった風体をしていた。

鹿皮をなめしたブーツに、生地を何枚も重ねた丈夫な白いズボン。上半身にはエルフが身につけるような深い緑色のチュニックを身に付け、肩から脛まで守る厚手の前掛けには、革の補強も兼ねて意匠を凝らした模様が縫いこまれている。

それらの上からこげ茶色のマントを羽織って、アーディナルの伝統的な狩人のスタイルが出来上がる。

腰には刀剣と呼ぶには短すぎる大ぶりのナイフを差し、肩には矢筒と弓をきちんと揃えて背負っていた。

齢十九にしてこの街の自警団長を務める事となったこの男は、雄牛二頭と重さが釣り合うインゴットのような巨漢で、そこらの悪党どもなら睨みつけただけでたちまち怯んで逃げ出し、声を掛けられただけでぎゃんっと叫んで昇天しそうな厳つい風貌をしていた。

しかし彼は元々自警団だったのではない。普段この町より田舎のさらに田舎の森に住んでおり、ときおり毛皮を売りに王都に訪れているただの狩人なのであった。

ところが偶然通りかかった街の代表者の会合に呼ばれた彼は、右から左から正面からワインをどんどん勧められて、いえ、自分は村に帰らなければなりませんし、お酒はそんなに飲めませんし、などと首を横に振っていたのだが、気がつけば完全に酔いつぶれてしまっていて、自警団の役割を唯々諾々と引き受けてしまっていた……らしいのである。

翌日目を覚ました彼はびっくりして目が点になっていた。自警というのはふつう自分の住む場所を守るためのものである。

しかし、彼はいつの間にかこのサンシャイン通りに新しい住居を与えられ、あまつさえこの町の住人にされていたのである。

なにしろ時代が時代であった。七五〇年、東部アーディナルに革命の嵐が吹き荒れていた頃の話である。
ゼフス王国もいままさに反乱軍との壮絶な戦いを繰り広げており、魔法障壁によって外部から隔離されているこの王都のみがこうして平和な様相を保てていた。
しかし、魔法障壁の内部からも物騒な事件が頻発するようになってくると、各町が独自に自警団を結成し、交代で夜警をするようになっていたのだ。
このアイス＝ブルーム町もそれに倣って自警団を設置した町のひとつであるが、もし、本格的な戦闘になったら。
――例えば、王都では一般人には所持が禁止されている銃や剣を持った敵が現れたら。
武器に認定されていないような短弓やナイフでそいつに立ち向かえというのは、かなり危険きわまりない話である。
要するに賢い町人たちは、その危ない役目を偶然通りかかった強そうな熊にむりやり押し付けたのだ。
賢い熊はそのことを知っていたが、もはやどうする事も出来ない。

こうして選ばれた熊のような自警団長は、つい今しがた空から落下してきたばかりの光る双葉の苗をじっと見下ろしていた。
空から落っこちてきたのを不思議に思っていると言うより、きっと今日は疲れているせいだろう、と思い為そうとしているような、すでに諦念しきった感じのうかがえる顔つきであった。
ロブロはきょろきょろと辺りを見回すが、ここには魔法使いの塔の影もない。
家主が留守で長いこと締め切った二階の窓や、人気のない屋上の他は何ひとつ見当たらない。
この植物は一体どこから落ちてきたのだろうか？　ロブロには分からない。
ぽっかりと開けた夜空を見上げると、ついつられて彼の口もぽっ

かりと半開きになった。

自警団長は胸の肉に食い込んでいた皮帯を外し、矢筒と弓を丁寧に脇に置くと、熊のようにのっそりとした動作で植物の前にかがみこんだ。

膝を汚さないように前掛けを使いながら、しゃがむのも一苦労しそうな巨体で器用にうずくまると、革の手袋の厚みで一回り巨大に膨らんだ手をそれに差し出した。

空から落ちてきた謎の苗はいかにも軟弱そうで、その気がなくともあっけなく潰してしまいそうである。

つぶしてしまわない様に、慎重に根ごとすくい上げる。

そうして両手の中に収めた苗を熊のようにじっくり観察した。

すでに大量の汗をかいており、立ち上がったときにははあふうと大きく息をしていた。

だが、立ち止まってはいられない。彼は光る苗を大事そうに抱え込み、自警団の詰め所がある方とは逆に通りを急いだ。

＊＊＊

平和な夜に、人の助けを求める声ほどよく響くものはない。

自警団長ロブロは拳を振り上げ、力の限りドアをノックした。蝶番がぎし、ぎし、ぎしと悲鳴をあげる。

ようやく顔を出したのは、ロブロより頭二つ分背は低いが、それでも背の高い部類に入る好青年である。

白いシャツは裾や胸元がはだけているが、不思議と不潔感はない。

白みがかった金色の髪はしっとりと頭の形に張り付いており、寝癖もついていなかった。

小さな耳たぶのピアスが手元のランプ（落ち着いた白光を放つ魔石が入っている）の落ち着いた光を反射している。

「俺の睡眠を妨げるのはどこのどいつだ？」

「ああ、眠っているところすまない、また急患なんだ」
「またか？」
フランはかたく目を閉じ、目と眉と眉間の辺りで「業」の字を書いていた。
この青年、実は医者でもなんでもない。ただの花屋だ。
彼とロブロの出会いのきっかけは狐だった。
ちょうど彼の店の向かいにはロブロが薬草の類を買っている行きつけの店があった。
血を流してぐったりした狐を抱えたロブロは、そこの軒下を借りて治療を始めたのである。
王都で野生の狐など珍しいもので、店の前にはわんさと人だかりが出来始めていた。
フランも商売どころではなくなったので、面白半分で様子を見にいったのである。
ロブロは狩人のくせにろくな薬草の知識もないらしく、傷口もろくに洗わず直に薬を塗ったりして、さらにその調合もひどく大雑把なものであった。
狐は涙を流しそうな眼をしてけんけん鳴いており、体は焼き魚みたいに反り返っていた。
その狐を絞め殺しそうな勢いで包帯をぐるぐる巻き始めたものだから見ていられない。
ちょっとばかり薬草の知識があったフランが、見かねて治療に手を出してやった。
たったそれだけの縁だったが、なんの因果か数ヵ月後にこのサンシャイン通りの自警団になってしまったロブロは、その後も傷ついた野生動物を見掛ける度にフランを頼るようになったのである。
「あのね、何度も言っているけどなるべく夜には来ないでくれよ、花屋の朝は早いんだから」
「分かっている、患者が人だったら極力医者を頼るようにしているさ」

「そりゃご立派だね。じゃあ今度は何、シマリス？　それともウサギか？」
　ロブロは、お椀型にした手の中でぐったりしている緑色の生物をそっと差し出した。
「動物界（アニマル・キングダム）ですらねぇのか……」
　フランは気を失いかけたように、ぐったりと自分の腕によりかかった。
「お前はなんて可憐な少女だよ。そんなもん、適当に庭に埋めて水でもぶっかけときゃいいだろ」
「いや、種類がわからないからお前に聞きたいんだ」
「そんなもん辞典引いて調べろよ何のために公立図書館があるんだよ」
「少なくともこの辺りではぜんぜん見かけない種類なんだ。たぶん、輸入植物か魔法植物だろう」
　眠たげなフランは眉をしかめて、ロブロの手の中に眠っている植物をじいっと見つめた。
　ぐったりとしおれており、暗闇の中で、ぼうっと弱々しい光を放っている。
「な？　見たことないだろう？　いずれにせよ貴重な植物だと思うんだが」
　ふんふんと頷いていたフランは、ロブロの手の中からその苗をひょいとつまみあげると、なにやらポケットをごそごそと探り、中から細長い筒を取り出した。
　それはライターだった。彼はとつぜん苗に火をつけ、ロブロはぎゃあっと悲鳴をあげた。
「俺の、図鑑に、載っていない花なんざ、みんな燃えちまえばいいっ！」
「やめろ！　フラン！　やめるんだ！　ぎゃああっ！」
　激昂するフランとの格闘の末、ロブロはようやく彼から植木鉢と腐葉土を手に入れることに成功した。

危うく全焼を免れた苗は、その中央にちょこんと植えつけられた。
フランは肩でぜえぜえ息を切らして言った。
「ロブ、お前は、魔法植物を甘く見ている」彼は額の汗をぬぐってロブロに言った。「ほうっておくと一体何が起こるか分からない。並外れた適応能力でどんどん繁殖して、その地域の生態系に甚大な影響を与えるんだ。ひょっとすると反乱軍がこの町に仕掛けた《生物兵器》だという可能性だってある」
反乱軍の名を出されると、ロブロはいつも悲しい気持ちになった。
この国では悪人のように言われている彼らであるが、魔法障壁の外からやってきたロブロには、彼らの中に数名の知人がいた。
知人達は彼の知る限りむやみに人を傷つけたりしない、心根の強い奴らばかりであったが、王都に入ってくる情報は彼らの悪い噂ばかりで、関係の無い一般市民に対する略奪や破壊活動も頻繁に行われていると聞いて、ロブロはひどく驚いたものだ。
反乱軍の活動は名目上、貧困にあえぐ民衆を救済することだとも聞いている。
実際にどのような事が行われているのか彼には知りようがないのだが、少なくとも、今日まで生物兵器を街に放つようなそんな破壊行為はしてこなかった筈である。
「生物兵器なんかであるものか。ひょっとしたら、ただの遺失物ということだってありうる。輸入品だとか、魔法使いの塔で作られた新種だとか」
仲間たちを信じていたロブロは、別の可能性も示唆した。
「それに生物兵器だとしたって、国王軍が作ったものかもしれないじゃないか」
「だった、なおさら燃やすべきだ。そんなもん、根絶やしにしちまえ」
フランは目を怒らせ、冷たい声で断言した。
この青年はどっちの味方なのだろう。恐らく、どっちも同じくらい信用していないというのが正しいのだろう。

「ロブ、俺の嫌な予感は当たるんだ。そいつはろくな植物じゃない。花屋の勘を信じろ。絶対に、今からでも遅くないからそいつを燃やすんだ。わかったな」

そうは言われたものの、ロブロはむやみに動植物を傷つけたりすることのできない、心優しい狩人なのであった。

自警団の本部に戻ると、鉢植えを窓辺にそっと設置し、なるべく日が当たるように鉢の位置を調節した。

手袋を脱いで、イモムシのような太い指で葉に触れてみる。幸いにも葉の一枚が焼け焦げただけで、それほど重症には至っていない。

傷の深さを確認し終えて指をどけると、茎は寒そうにぶるると振るえ、そのさい燐光がぱっと辺りに散った。

コップの水をたっぷり注いでやると、土の中からじゅごおぉぉぉという威勢のいい音が聞こえてきて、たっぷり注いだはずの土は見る間に乾いていった。

ロブロの目の前で茎はぐんぐん成長し、双葉の脇から、ぽんっという音さえ聞こえてきそうな勢いで三枚目の葉っぱが飛び出した。

ロブロは思わず微笑んだ。これは害の無い植物だ。間違いない。そう確信して、彼はベッドに入ったのだった。

エア（夏至）の3日、晴れ

その日、ロブロは彼が発見した植物が魔法兵器ではなく、ただの珍しい植物であるということを証明するべく、早朝から聞き込みに回っていた。

店一軒一軒をまわって、外国の植物を仕入れた事はないか、あるいは、そういった植物を持っていそうな人はいないかなど聞いて回ったが、どれも空振りのようであった。

最後にロブロはサンシャイン通りの奥まったところにある、丘の上に建つ豪邸を訪ねてみた。

この家に近寄るのはためらわれる。なんせ主人が夜中に家から飛び出してきて、ロブロに相談を持ちかけた事があるのだ。

いわく、俺は妻に殺される、家を乗っ取られる、と。そのエンセル夫人は国外の珍しい輸入品を収集している好事家で、ひょっとすると彼女なら知っている可能性もある。

ドロドロした家庭の事情など微塵も感じさせない、植え込みもどこかおとぎの世界のようなメルヘンチックな庭園を横切り、玄関の真っ白い柱に阻まれながら呼び鈴を鳴らしてみた。

間もなく、ドアノブががちゃっと下がった。

しかし、ノブが下がっただけで何も起こらない。しばらく待っていると、ドアが少しだけ開き、イタチのようにしゅるりと人がすべり出てきた。

片手にワイングラスを持ち、肩と胸の大きくはだけた紺色のドレスに身を包んだ、どことなく危なっかしい雰囲気の女性だった。

顔は小さく、その造形には口元のホクロから小さな鼻に至るまで、磨き抜かれたような美しさが漂っている。

髪色と同じで尖った印象を受ける銀色の目でロブロを見上げると、にこりともせずに言った。

「あら、どこの熊かと思ったら親分じゃない」

「こんにちは」
ロブロは帽子を取って礼をした。
「あの、リサを呼んでくれませんでしょうか」
エンセル夫人は形のよい顎をついと上げ、なまめかしい視線を保ったままだ。
この夫人は苦手である。正直、彼女が直接出てくるとは思っていなかったロブロは冷や汗をかいていた。
「リサですか？」
「彼女に二、三、聞きたい事がありまして」
そう言うと、エンセル夫人のこめかみがぴくりと動いた。
「まあ、彼女がまたなにか、粗相を？」
「いえいえ、とんでもない」
ぶんぶん首を振って否定した。
リサはこの家に仕えている侍女である。毎朝丘の上から市場まで食材を買いに出かけ、看板のあるパン屋で必ずパンを買って帰る。
本部の前を通るときは必ず挨拶をしてくれる。人付き合いのよい女性なので、ロブロとも仲がよいのだった。
どう言っていいものか悩みながら、ひとつひとつ慎重に言った。
「昨晩にですね、通りの方でちょっとした遺失物……あ、いえ、ちょっとした『事件』がありまして。彼女なら、夕方ごろあそこを通ったのではないかと思って、詳しい話を聞きたいんです」
エンセル夫人は黒いマニキュアを縫った爪で唇にくぼみを作り、じいっとロブロの顔を見ていた。
相談しに来た彼女の主人によると、彼女の銀色の目はどんな些細な嘘でもすぐに見破ってしまうという。
ロブロは必死で笑顔を取り繕っていたが、ばれているかも知れない。
足の内側を擦るような歩行法を使って、知らないうちにどんどんロブロの目の前に近づいてくる。
「リサには今、用事を申し付けておりますの。私の方から、伺って

おきましょうか？」
「あ、い、いえ、大した用事ではないので、居ないのならまた別の機会に」
「せっかく暑い中おいでになられたのですから、冷たいお飲み物でもいかが？」
「せっかくですが、今は見回りの途中ですので、できればまた夜警の時にでも」
「そう」
残念そうな顔をした夫人は、ロブロの手にそっと触れると、長い爪で手の甲をかりかりと引っかいていた。
「じゃあ、それまで一人ぼっち？」
やはりこの夫人は苦手だ。
「あの、リサがいないのなら、この辺でお暇させていただきたいのですが。構いませんか？」
夫人は真顔になってふっと体を離すと、ロブロの顔をまじまじと見つめた。
相変わらず表情を押し殺した仮面のような顔だったが、冷徹さの中に怒りがにじみ出ている、極めて恐ろしい表情のように思えた。
「いえ、居りますわ。……少々お待ちを」
彼女はその場に強烈な香水の香りを残して、屋内に姿を消した。その隙にロブロは軽くむせた。
リサはどうやらすぐそこに居たらしい、夫人とほとんど行き違いにエプロン姿の侍女が姿を現した。
リサは血相を変えて飛び出してきて、親分のどてっぱらに突き当たった。
「ご、ごめんなさい、すみません、申し訳ございません。親分、ところで、あの、今日は何の御用でしょうか？」
ようやく本題の話ができそうだった。中の夫人に聞こえないよう、ロブロは声を潜めて言った。
「実は昨晩、本部の前で遺失物を見つけてね。珍しい植物だったか

ら、夫人が収集しているものの一部ではないかと思って」
リサは当惑した様子で、ぽかんとロブロを見上げた。
「だったら、私よりも夫人に直接お話をなさった方が……あ、そうですか、私がおっちょこちょいだから落としたかもしれないと、わ、私が落とすはずが無いじゃないですかっ！　失敬なっ！」
両手の拳をぎゅっと握って、真っ赤な顔を突き出してくる。
いつも何か失敗をやらかしては夫人にお目こぼしを貰っているのだが、本人は至ってこの調子である。
「か、可能性の話だよ」ロブロは両手を広げて彼女を制した。「万が一、そうだったら困っている所だろうな、と思ってね。聞くところによると、夫人はいつも君に辛く当たっているそうじゃないか？」
「うっ……！」
「だから、気づかれない内にこっそり解決しておこうかと……」
ロブロが片目をつぶって見せると、リサは両手で茶色い頭をがっしと掴み、「なんて事をしてくれた」と叫びだしそうな顔をして、すばやくドアの中を確認した。
夫人が階段の方から、冷たい目でじろりと二人の様子を見ていた。
それを確認すると、彼女は困り果てた様子で、ほとんど幼児が暴れるみたいに手足をばたばたさせてスカートの裾をはたいた。
「あなた、本当に、どうして私が奥様に辛く当たられているのか、ご存じないのですか！」
ロブロは不意打ちを食らったように目を丸くした。彼なりに思い悩んでみたが、そんな理由が熊に分かるはずもない。
「どうしてだい？」
「どうしてって……」
リサはドアと親分を十秒間に十数回も見比べ、顔を真っ赤にして髪をかきむしった。
「もう、そんなことを、言ったら、それこそ私が殺されてしまいます！　つい最近、屋敷に植物を仕入れた記憶はございませんし、そもそも奥様の輸入品を私が屋外に持ち出したりなどいたしません！

念のため、盗難品がないか在庫を調べますので、見つかり次第、折り返し連絡いたします！　これでいいですね！？」
もうこれで用は済んだか、と言わんばかりに胸を張って段取りを決めてしまうと、ロブロのマントをぐいと引っ張り、ナイフを抱え込むように体を丸めた姿勢になって、小声で脅すように言った。
「ですから、親分。お茶でも上がってゆかれませんか？」
なぜだろう、何か切迫した表情で、恐ろしいくらい真剣なまなざしを向けられている。
なぜそんなに必死なのか。寄らないとそんなに困るのか。柱の間に挟まって身動きが取れないロブロは、ごくりと喉を鳴らした。
「い、いや。まだ勤務中だから……あとで寄るよ。ありがとう」
口惜しそうに手が離されて、ロブロはゆっくりと柱の間から遠ざかっていった。
リサの悲痛なまなざしがロブロをじっと追いかけていた。まるで見捨てられる子猫のような目だった。
挨拶もそこそこに、ロブロは乱れたマントを着なおすと、一目散に屋敷を退散した。
急ぎ足で庭園を抜け、門に差し掛かったあたりで、屋敷の方から盛大に食器の割れる音がした。
ガチャーン。バリーン。
それに続いて、リサらしき女性の泣き声も聞こえてきた。
またか。おっちょこちょいな娘だ。これもこの屋敷ではいつもの事である。
ロブロは肩をすくめて、夜警のときの事を考えながら門から出て行った。

結局、その日は例の植物の落とし主に関する有力な情報を得る事はできなかった。
疲れた顔で本部に戻ったロブロを、ささやかな花束くらいに成長した植物が待ち構えていた。

「ははは、どんどん成長していくなお前は」
窓を開けてやると、水を催促するようにわさわさと葉を動かしている気がした。もちろん風で揺れているだけなのだが。
こうやって成長していく姿を目の当たりにすると、不思議と植物にも愛着がわいてくるものである。
フランに貰ったじょうろで水をやっていると、彼に続いて若者が自警団本部に帰還してきた。
ぼさぼさの髪に無精ひげ、肌の色は浅黒く、いかにもストリート育ちといった青年だ。
いつもジャンパーのポケットに左手を突っ込んでいるが、理由を聞くと、いつ敵に襲われるか知れないから、用心のためにナイフを握っているのだという。
がに股に歩くのも、右にも左にも逃げられるようにだという。むっつりと何か考え込んでいるような顔をしており、彼の背筋が真っ直ぐになったところを見た事がない。
口はへの字に曲がっているが、ロブロの前ではいつも歯並びの悪い口を開いてへらへらと笑っていた。
「あ、親分。お帰りでしたか？」
「ステファン。どうだった？」
青年は一瞬考える振りをして、ああーと口ごもりつつ、親指で鼻をきゅっと押さえた。
あまりいい成果は期待できなさそうな雰囲気だ。
「もうちょっと、なんですがね」
もうちょっとだ、もうちょっとで何かが起こる。そういう口ぶりだったが、どうせ仕事をサボってカジノにでも行っていたに違いない。
ステファンはいわゆる不良だった。だが、根っからの悪人というわけではなかった。
ただ強い者にくっついてブラブラしていたいだけのだらしのない青年で、以前までは闇の世界の悪人に付き従っていた単なる下っ端

だった。
しかし、ゼフスの情勢が荒れてきた昨今、闇の世界の方も色々と大変らしく、ステファンの周囲にも次第に血なまぐさい事件が付きまとってくるようになり、途中で怖くなって逃げてきたのだそうだ。
彼を追いかけてきたメンバーに町中で掴まってしまい、あわや制裁を受けそうになっていたところに突如現れ、彼らをひと睨みで退散させてしまったすごい男がいた。
それがロブロであった。
彼はそのとき、ちょうど怪我を負った狐を担いで医者の間を右往左往していたところであった。
全身に狐の返り血を大量に浴びており、しかもどの医者もとりあってくれずにイライラしていた。
背中から逆光を浴びていたため、発汗した皮膚から立ち昇る湯気がくっきりと浮かび上がり、今しがた人を殺めてきた殺戮者のようなオーラをまとっていたそうだ。
まだだ、まだ足りない――！
といった貪るような目つきで彼らを見下ろしており、もし足を折っていなかったら彼も逃げていたと、ステファンは後に語った。

それ以後、ステファンは片足を引きずりながらロブロの周りをうろちょろとついて回る子分になった。
「気をつけな、うちの親分は夜になると手ごろな木を素手でへし折って家に持ち帰り、素手でむしりながら火にくべるのが森での日課だった男だぜ？」
「へっ、そんな悪党がなんだってんだ。親分は自警団に就任したその日、すでに十五人を殺していたぜ？」
「もうちょっとまけろよ、親分は一日に熊一頭は平らげないと食った気がしないお方だからな」
恐らく本人が聞いたらきっと目をむくはずのロブロ伝説を吹聴してまわっていた。

子分を名乗ってはいるが自警団の正式なメンバーになる気はないらしい。
どっちつかずの青年で、今回みたいに「珍しい植物が落ちていたので落とし主を探して欲しい」などというあまり価値のなさそうな仕事は適当にサボってしまう。
けれども人命がかかっているような急を要する事態だと、ロブロにはとても出せないような脚力を発揮して町中を駆け回ってくれる。
彼以外メンバーのいない自警団には貴重な人材である。その気になってくれればいつかは真面目に働いてくれるだろうと信じていた。
ロブロは財布の紐を解くと、それほどない賃金から銀貨を一枚抜き取り、今週分のお駄賃として渡した。
「また頼む」
ステファンは、へっへっと卑屈な笑みを浮かべて銀貨を受け取り、ジャンパーのポケットに突っ込んでそそくさと退散していった。
今日はひどくくたびれてしまった、窓辺の植物だけがこの街の癒しである。
ロブロは葉っぱを撫でて、探さなければ見つからないくらいになった小さな火傷の跡を確認し、日誌をぱらぱらとめくってみる。
日誌には日付と太陽、あるいは雲の記号しか書かれていない。彼はまだ字が書けなかった。
今日の日付と太陽の記号を日誌に書き込むと、彼は日が暮れるまで読み書きの勉強をするのだった。

＊＊＊

日が落ちると同時にロブロはカンテラを持ち、狩人の装いになった。
玄関先に置いてあった弓と矢筒を肩に背負うと、再び夜警に繰り出す。
自警団本部は町民会議が行われる公民館の二階、もとは物置だっ

た場所を改装した大きな部屋で、ロブロが出てゆくと物音ひとつしなくなる。
しんと静まり返った室内で、この街の史料などを並べた本棚の隙間からきょろきょろと辺りの様子を伺っている者がいた。
二対の羽根を音もなく羽ばたかせ、軽々と空を飛ぶ。
妖精である。
会議用のテーブルやソファの上を光の尾を引きながら飛び、窓辺の植物の葉群に飛び込むと、彼女は身を潜め、じっと窓の外の様子を伺った。
一階の戸をばたんと閉じる音や、ちゃらちゃらと鍵を鳴らす音。
カンテラの光がのっそりのっそりと通りを歩んでゆく姿が確認されると、妖精はふうと息をついた。
「よーやく見つけたぜ……」
予想以上にてこずってしまったが、どうやら彼女が落としてしまった植物は無事な様子である。
適当にその事を確認すると、早速根元に飛びつき、鉢から引き抜きにかかった。
「こいつ、たった二日でこんなに成長しちまいやがって……おまけに可愛い鉢にまで植えられちまって、魔法植物の王がなんとまぁ」
根っこを引っ張ってうんうん唸っていると、植物はまたしても抵抗を見せた。
今度は妖精の背中にぽとりと冷たい何かが落ちてきた。
さらにそれは服の中の手が届かない位置で、無数の髭のような手をわしわしと動かし始めたのである。
妖精は背中側の全筋肉を収縮させて飛び上がり、はずみで茎に膝をぶつけて悶絶した。
地面に落ちた鳥が痙攣するように羽根を俊敏にはためかせた。
格闘の末どうにか取り出してみると、テントウムシである。アブラムシから植物を護る愛らしい鉢植えの騎士だった。
こぶし大のテントウムシが彼女の手の平にうずくまり、顔を真っ

赤にした妖精をあざ笑うかのように顎をもそもそと動かしていた。
妖精は顔を紅潮させて、波打った短い金髪をさらにくしゃくしゃに乱し、怒りに震えながらテントウムシを指差した。
「て、て、てめぇっ……昆虫の分際でアルシーノ＝マクモニティ様に歯向かうとはいい度胸じゃねぇかっ！
この俺を誰だと思ってやがる、いつまでもそんな余裕たっぷりの面白いツラをしていられると思うな！」
テントウムシは背中の甲羅をぱかっと開いて、あたかも挑発するかのようにその派手な模様を見せびらかした。
さらにその下に格納されていた長く茶色い羽根を高速で動かして、彼女の手の平から飛び去っていった。
ゆっくりとその場に立ち上がったシーノは、あえてテントウムシの後を追うこともしなかった。追う必要も無いのだ。
彼女は妖精族が共通して扱える《光魔法》を駆使し、暗闇のどこかに消えてしまったテントウムシの気配を察知する事が出来る。
シーノは人さし指を真っ直ぐ闇に伸ばした。そして、次に自分の足元を指し示した。
「戻ってこい、虫ィ！」
彼女が指を振って命令すると、やがて暗闇からぶぶぶという不安定な羽音を響かせながら、テントウムシが飛んできた。
なぜか後ろ向きに飛んでくる。後ろに引っ張ろうとする強靭な力に抗っているかのようである。
とうとう観念したように抗うことをやめ、真っ直ぐすーっと後ろ向きに飛んできたテントウムシを、シーノは両手を広げてお腹の辺りでキャッチした。
土の上にねじ伏せ、鉢の上で取っ組み合いのけんかを始めた。
テントウムシは後ろ羽根をたたむのも忘れたまま甲羅を閉じ、慌てて防御の姿勢に入った。
「こいつめ！　こいつめ！　思い知ったか、このっ！」
甲羅をばしばし叩いて懲らしめていると、上からさらにもう一匹

のテントウムシが落ちてきて、シーノはもう一度土の上にひっくりかえった。
「二人がかりだとっ……ひっ、卑怯だぞっ！」
一匹の妖精が二匹のテントウムシと乱闘に夢中になっていると、いきなり強い光が彼女とテントウムシを照らし出した。
ふと顔を上げると、カンテラの強烈な光の向こうに熊のように大きな男の顔が浮かび上がっていた。
この部屋の主、ロブロである。真下から光を浴びたその顔は驚愕に固まっており、暗闇でさらに不気味さを増していた。
「……（何者だ、一体どこから入った、いや、それ以前にこれは果たして現実なのか。はたまた俺が見ている夢なのか、
どっちでもいい、今すぐに消えてくれ、そうしたらぜんぶ俺の幻だったと思いなすから。
それ以外の答えは今、精神的に受け付けられそうにないんだ、頼むからお願いだ至急的かつ速やかに消えてくれ。
なぜだ、どうして消えてくれないんだ、夢か、ははん、俺は疲れて夢を見ているのだな。
さすがに俺も働きすぎかもしれん、休憩時間ぐらい休んだ方がいいかもな。
しかるにこれは一体どんな精神状態を示唆する夢なのであろうか？　ふむ、こんどは夢占いに興味がわいてきたぞ。
しかしなんとも形容しがたい夢だな、これは。第一、こいつはいったい……）……何をやっている？」
妖精は二匹のテントウムシに馬乗りになりながら、口を丸く開いて、何か言い訳を探すようにぱくぱく口を動かしていた。
まさか、この木を盗み出そうとして木から抵抗を受けたなどという事は言えない。
どんな言い訳をしたところで、この熊のような男には通用しそうになかった。
「俺？　俺か、俺は、この木を、護ろうとしていた、ただの通りす

がりの優しい妖精だよ。いや、違くて、俺は……そう、木の精霊」
熊のような男は、実際なんと言われようとも同じ反応を示したに違いなかったのであるが、怪談話を聞くような慎重な目つきをしていた。
言葉のひとつひとつをかみ締めるようにそうか、そうか、よしよし、うんうんなどと頷き、この突拍子もない夢に隠された自分の深層心理に思いをめぐらせていた。
「そうか、ご苦労」」
男が目の上に片手を掲げて敬礼すると、木の精霊になりすました妖精もびくびくしながら目の上に片手を掲げ、敬礼を返した。
「ご、ご苦労」
ロブロはぐるりと向きをかえて、カンテラを机の上に置くと、そのまま備え付けの簡易ベッドの上に横たわった。
スプリングが「ぐぎゃーっ、こんな重いものはいまだかつて経験したことがないわー」のぐぎゃーっに相当する悲鳴をあげつつ、どこまでも沈む込もうとするその巨体をなんとか支えきった。
ロブロは植物に背中を向けて寝転び、そのまま朝が来るのを切実に待った。
「……なあ、おっさん、頼むから下で寝てくれよ。そこに居られると、あの、邪魔なんだけどさ。色々と」
というシーノの切実な願いも意識の外に遮断し、ただひたすら深い眠りの世界をロブロは目指すのだった。

エア（夏至）の４日、？？？

東部で最も美しいと褒め称えられる白鳥城の地下には鍾乳洞が広がっており、おどろおどろしい《魔物》をかたどった彫像が所狭しと並べられている。

異教の神殿を思わせる広間の壁には、彼ら魔物たちを人間の領土から駆逐したという英雄テルシオ＝デル＝セトの物語がずらりと描かれており、その最奥には、彼の相棒の白竜を象った玉座が悠然とそびえている。

その白竜の腹に顔を押し付けるようにして、がたがたと震えるやせっぽちの青年が居た。

見るからに病弱で幽霊に怯えるようにおどおどしているが、彼こそは、現在魔法大国ゼフスの頂点に君臨する大王、レオノールド＝ウィンベール＝ゼフス＝ケイオン十一世その人であった。

彼は東部の天才作曲家がテルシオ伝説を元に生み出した歌劇に傾倒し、あまりの熱愛ぶりに城の地下に劇場を設けて連日ひとりで鑑賞していたほどのファンであった。

時に頬を赤らめて拍手を捧げ、時に青ざめて息を飲み、四日に渡って演じられる劇の台詞を今ではすべて諳んじることが出来るテルシオ・オタになっていた。

そしてこの歌劇さえなければ市民革命は起こらなかっただろうとさえ言われている通り、王が城の地下で歌劇を鑑賞している間、治世は放ったらかしになっていた。

地上では王侯貴族が好き放題に暴れまわり、王は連日のように歌劇に没頭。

もはやこの王には任せて置けぬと魔法国家ゼフスに募った優秀な魔法使いたちがコミューン（経済共同体）を結成し、郊外の農民達を率いて領主に対して武装蜂起した。

それが反乱軍のはじまりであった。

そしてこのコミューンが提唱する民主主義思想にいまや多くの人民が共鳴し、東部全域で市民革命が巻き起こる事態にまで発展していたのである。
そしてこのときこの王が取った行動は、まさに空前絶後であった。何を血迷ったか、さらに莫大な税金をつぎ込んで、この夢のテルシオ・ミュージアム宮殿を城の地下に築いたのである。
このまさかの愚行に、彼を信じて辛抱強く諭し続けていた先代からの家臣でさえ絶句。唯一頼れる彼らは王の気づかぬ間に家財を持てるだけ持って城から離散していた。
後に残ったのは魔法障壁に守られた王都と十名に満たない家臣と百万ほどの兵士、そして城の地下の歌劇だけとなってしまった。
なにただのテロだろどうせすぐに鎮圧されるさと高をくくっていた革命はもはや歯止めが利かなくなり、魔法障壁の一歩外は火の海と化していた。
もうだめだ。このままではだめだ。だめだ、だめだと自覚してはいたのだが、自覚していたからといって、何をすればいいのかはっと自然に分かるようになるわけではない。
残った家臣たちのアイデアは実に凡庸、退屈で、その場しのぎのものばかり。なんら根本的な解決にはならないような気がする。
「おおドラゴン……白き翼と白き魔力をたたえたドラゴンよ……世と契約を結びたまえ」
とうとう外界からの騒音を遮断したケイオン青年は、ドラゴンの腹にうずくまり、なんかこう自分にも英雄的な力が沸き起こるんじゃないか的な奇跡を夢想する日々を送っていた。
「世にその大いなる力を貸し与えよ……そして、そして共にこの戦乱の世を治めるのだ……！」
言い知れぬ不安に襲われた時、ケイオン十世はぶるぶると震えだし、ドラゴンの玉座にすがりついた。
そして目にはめ込まれたエメラルドの瞳の輝きを見つめ、より一層深く自分の殻に引きこもるのであった。

『よかろう、お前は既に三度この私に契約を求めたのだ』
するとドラゴンは緑色の瞳をきらりと輝かせ、こう返事をする。
『我が永遠の魂はお前の永遠の魂とひとつになり、千年の世にわたってお前の一族を守護するであろう』
もちろんケイオン十世の独り言である。彼は恐る恐るドラゴンのエメラルド・グリーンの瞳に触れてみた。
「……ぐわあああああっ！　おわあああああっ！」
突然、電気が走ったかのような衝撃が走り、王は飛び上がって胸をかきむしった。
暫くもがき苦しんでいた彼は、あるときふと、自分の中に目覚めた不思議な力を自覚するのである。
「おお……おお、おお！」
手の平を見つめると、じんわりと温かみを帯びている。
「力だ。力が溢れてくる！　ああ、見える、見えるぞ！　見晴らす限りのカルゼチバンの山々、ユーコルギアの高原、あれは私が生まれた森だ、そして我が故郷！」
彼は《千里眼》を手に入れたことを確信し、歓喜の声を上げようとする。
だが、ふと遠くを見詰めて愕然とし、反対に恐怖に青ざめるのだった。
「見える、見えるぞ。……何ということだ、これが、世界か。……何という、おぞましい姿。闇の世界の魔物が跋扈し、地上の人々を苦しめている。
ああ、やめろ！　苦しみにあえぐ人々は互いに不信を抱き、盲目的に争いを繰り返している！　彼らはまったく真実が見えないのか！」
『そうだ、それこそこの世界だ』ドラゴンはゆっくりと呟いた。
「そうか、お前はいままでこのような人間の世界を見てきたのか……。この混沌とした世界の全てを、我が脳は真鍮のように明らかに捉えている。

そして今ようやく分かったぞ、ドラゴン、人間を呪われた種族だと見放したお前の諦観が、嘆きが……そして怒りが、魂を分かち合った我の中に息づいているのを！」
ケイオン十一世は苦しみの鎖に打たれるように身をこわばらせた。だが、それに抗うように拳を空高く突き上げ、そして誓いの言葉を立てるのだ。
「違うのだ。信じてくれ、ドラゴン。これは、かようなものは我々人間の本来の姿ではないのだ……！
彼らはいつ終わるとも知れぬ争いの中で恐怖して、今は獣の仮面を被って怯えて過ごしているに過ぎないのだ……！
見よ、そなたにも見えるであろう……盗人が家族の前でのみ見せる、安らいだ表情を。
見よ！　人に見られぬところで涙を流す、血塗られた戦士の顔を！
平穏の中に息づき、仮面を外したときこそ、人々は本当の心を取り戻す事が出来る。
信じてくれ、その姿こそ、その姿の方こそが人間の本当の姿なのだという事を……！
我は、ここに誓おう、ドラゴンよ、汝の力をもってこの世に平定をもたらし、本当の人間のみが息づく国を創造することを。
我が命の尽きんとも、千年の魂を賭して、この世界のあまねく人間のかつての姿を取り戻してみせる！」
彼は歓喜に打ち震え、快活な雄たけびを上げ、ドラゴンの背から飛び降りた。
「行けえぇぇーっ！　ドラゴン！」
疾風のごとく大広間の内側をぐるぐると駆け巡ると、壁に記されたその後百年に及ぶ邪悪な魔物たちとの戦いが、彼の外側で目まぐるしく展開していった。
そのとき、彼の進行方向、広間の隅の方にひっそりと立っている不審な人影を見つけ、ケイオン十世はぎゃっと叫び声を上げた。
英雄の気概は一瞬で消えうせ、へなへなと及び腰になった王は、

一目散にドラゴンの玉座へと駆け出していった。
「た、た、誰ぞ！」
ドラゴンの腹に卵のようにうずくまって、そこからほとんど掠れるような声をあげる。
不審な人影は、棒のように垂直にたたずんでいた。ひどくほっそりとしていて、立っているのが不思議なくらいである。
紫色のローブに身を包み、顔には平坦な楕円形の仮面を被っている。中央に真っ直ぐで強そうな鼻柱が描かれ、T字に左右に伸びた眉の下に、満月のような大きな丸い目が二つ。簡潔な、まるで抽象画のような面だった。
「力が望みですかえ？」
がたがたと震える王の脳裏に、《魔女》の文字が浮かび上がった。仮面でくぐもってはいるが、女の声のように高い声であった。
だが、性別が分かったからと言ってこの王にどうする事もできないのだが。
「我らは西方より来たりし古の魔族の末裔、《白の主（しろのぬし）》。汝が祖先、《東の王（あずまのおう）》に救われ、命からがら白竜の手から逃れ、その後千年の世を生き延びた一族にござりまする……」
魔族？　白の主？　東の王？　不思議な単語を使う者だったが、家臣たちが使う単語よりも、この王にとってはとても親近感がわいた。
「白の……主？　まさか、お前は魔族の末裔だというのか？」
ケイオン十世はドラゴンの肩を掴んで立ち上がり、よいしょと手探りで尻尾に掴まって立ち上がった。
テルシオによって駆逐されたはずのアーディナルの魔族の生き残り。それが今、目の前にいるとは。
予想とは少し違った形ではあったが、ケイオン十世はようやく訪れた自分のパワーアップ・イベントに、恐れおののきながらも興味を示さずにはいられなかった。
「して、その白の主が、我に、東の王に、力を与えるとな？」

仮面の魔女は首肯さえしない。まったく絵のように動かずに答えた。
「汝がお望みとあらば……。我が一族、汝ら王族の盾となりて戦う決意をしております」
ケイオン十世は、体中の血液が熱く、沸騰してくるのを感じた。
「力ぁぁぁぁ！」
地下にミュージアムまで作って英雄を奉っていた苦労が、とうとう報われたような気がした。
そう、ドラゴンと千年の契りを交わしたイーサファルトの王族と同じく、ゼフスの王族にもまた千年の契りを交わした魔物の一族が居たのだ。
なんという、奇跡！　そしてなんという、おろかな間違いをしていたのだろう。
「そうだ私は西部の竜の王などではない、東部の魔族の王だったのだ！」
ケイオン十世は突然、高らかに笑い声を上げた。仮面の魔女も一瞬身じろぎした様子である。
彼はカザーフ島に巣食っていたとされる三つ目の猛牛の石像に歩み寄ると、逞しい腕に持つ剣を取って空に掲げた。
あたかもこの日の為に訓練されてきたかのような勇ましいポーズを取り、そして歌劇の一節を口ずさむ。
「同胞よ、戦いを止めて、東の空を見るがよい。あの朝は、我らが何をしていようとも必ずここへやってくる。アーディナルの栄光の夜明けである。
地上でいかなる悲劇が起こっていようとも、あの光はまもなく大地に降り注ぐのだ。ならば兄弟よ、争いを止めて、ただ東の空を見ているがよい。
目の見えるものは前に来い、口の利けるものは永久に語るがよい！　我らの王が、再び現れたのだ！」
ドラゴンの背中に立ったケイオン十世は、感極まって涙をこぼし

そうなほど震えていた。
壁に描かれたドラゴン・ライダーの戦いの図が、今は英雄に立ち向かった魔族の勇姿を称える慰霊碑にさえ見えてくるから不思議だ。
「お前達は、今日から我が同士である」
ケイオン十世は剣を降ろすと、背中越しに仮面の魔女に言った。
「今日からは、『王』の名を冠するのだ。《白の王(しろのおう)》と名乗るがよい」
魔女は、仮面の向こうでくすりと笑ったようであった。やはり、絵のように身じろぎ一つしなかった。
「ふ、仰せのままに、東の王」

エア（夏至）の5日、曇り

『自称』木の精霊、シーノの背丈は人さし指と変わらないほど。
葉っぱの繊維を編みこんだと思われる、きめの細やかなドレスから、ほとんど骨と皮しかないのではないかと思うほど細くて華奢な手足が伸びている。
たとえこの比率を保ったまま体が大きくなったとしても、女性というより少女のように小ぶりで華奢な人物になる事が伺えた。
「ただいま」
ロブロが朝の巡回を終えて自警団本部に戻ると、開け放たれた窓から差し込む光を受け、すっかり苗木らしくなってきた植物がわっさわっさと揺れていた。
シーノは揺れる葉群のベッドにねそべって、ふて腐れた顔を浮かべていた。
整った顔の中で一際目をひくのは、瞼だ。虹彩と瞳の色の区別がつかない大きな目もそうだが、ロブロは、これほどまでに盛り上がってくっきりとした瞼を見た事がない。
ほのかに緑がかった目は常に不機嫌そうに細められていて、その上の瞼がぐりっぐりっと感情豊かに動く。
精霊や妖精の類らしい尖った耳は、トウモロコシの房に似た金の縮れ毛から突き出しており、首を動かす直前やあくびをする時などに、当然のようにぴくぴくっと動く。
一番特徴的なのは、背中が大きく開け放たれたドレスと、背中から伸びた二対の羽根だ。
一枚一枚向こうが透けて見えるほど薄く、葉脈のような模様は何かの重要な光を走らせ、気ままにその模様をかえている。彼女が気まぐれに羽ばたくたびにその重要な何かは光の燐粉となってぱっと飛び散った。
「挨拶のひとつぐらいほしいものだな、それとも妖精には挨拶の習

慣がないのか？」
　ロブロがそう言っても、木の精霊は何故か不機嫌そうである。
　それもそのはず、謎の植物はすっかり大きくなって、もはや自力で運び出す事も困難になってしまっていた。
　やはりあの晩のうちに運び出すべきだっただろうかなどと愚痴りつつ、ロブロに願いを込めるような眼差しで呼びかける。
「ねぇ、俺、行きたい森があるんだけどさぁ。いつになったら外に連れて行ってくれるの？」
　マントを壁にかけたロブロは、いっそう狩人らしい前掛け姿になって肩をすくめた。
「仕方がないだろう。魔法障壁の外は内乱が続いていて、ひどく危険な状態なんだ。ゼフスの外は今はどこも同じだ。君のような魔法植物を持って旅をしていたら、たちどころに面倒に巻き込まれてしまうのが目に見えている」
　聞くところによると、押され気味だった国王軍がつい最近になって一気に勢力を盛り返し、魔法障壁の外まで迫ってきていた反乱軍を押し返し始めたとの事だった。
　ケイオン十世が一体どのような戦術を使ったのかはわからない。とにかく情勢は一向に安定しておらず、王都の外のどこも安全地帯とは呼べない状態だった。
　旅に出るとしても、今は困難だ。もう少し待てと、ロブロは何度も木の精霊に言い聞かせていたのだが。
「退屈で、死にそうなんですけど」
「そうか？　木の方は楽しそうに見えるが」
「それはお前の目の錯覚、風のいたずら。木が楽しむわけ無いじゃん、バカ？」
　ロブロはポット型の飲み水精製装置を傾け、じょうろに水を注いだ。公民館の備品で、魔石の力で自動的に水を溜めてゆくいわゆる魔法のポットである。
　幼木はわさわさと枝葉を揺らして、はやくはやく、と新鮮な水を

催促していた。
　王都には優秀な魔法使い達が開発したこのような魔法道具が沢山あり、最初は使い勝手に戸惑っていたロブロも、今ではもうすっかり手放せなくなっている。
「調子が悪いんだったら、一度フランに診てもらうかな。やっぱり一度専門家に見てもらわないと……」
　などと言いつつ、さっきからずっと葉っぱの様子ばかり気にしている。シーノはきっと顔を上げると、葉っぱをばんばんと叩いた。
「植物の事なんかどうだっていい、俺が退屈で死にそうなの！　一日中こんな狭いところに閉じこもっていてさ、話し相手もいないんだよ！？　ありえない、もう耐えられない！　我慢の限界、俺、木の精霊やめたい！」
「そんなむちゃくちゃだな」
「出来るもんね、ほら！」
　そう言って、羽根をぴかっと光らせて力強く伸ばし、宙に浮かび上がった。眼下のロブロを指差して宣言した。
「止めても無駄だかんね、俺ぁもっとでっかい木の守護精霊になってやる！　最低でも樹齢百年を超えた、この公民館よりでっかい巨木だ！　そいでもって、下界であくせく働く人間どもを見下ろして、片手団扇で土地を転がしながら華麗な日々を過ごしてやる！　お前はそのポットを持って、毎朝水をやりに来い。そうすりゃ秋にはドングリくらい拾わせてやるよ！　ふーんだ、あばよ！」
　シーノはくるりと宙返りして、幼木の周りにぐるぐると光の螺旋を残し、そのまま窓の向こうに消えていってしまった。
　引き止めるべきかどうか一瞬迷ったが、なんせ精霊の決めたことである、彼にどうすることもできない。
　仕方なく、ロブロは守護精霊がいなくなって大人しくなった幼木に水をやったのだった。

＊＊＊

「こいつは、また変わった魔法植物だな」
夕方ごろ、ロブロは自警団本部にフランを招いていた。もちろん花屋として、木の調子を看てもらう為である。
最初は乗り気でなかった彼も、異様な成長速度と回復力を見せる幼木に目の色を変え、打って変わって真面目な顔つきになっていた。
「魔法植物というのはふつう、育つ環境に応じて様々な魔法を身につけるんだ。人間が魔法の紋章を書くみたいに、《セルロース紋章群》という硬い細胞構造が生まれつき魔法の紋章を描いていて、それらが毒に対する抵抗力や自己治癒、あるいは生き物を不快にさせる能力をもつ魔法なんかを発動して身を護るんだ」
幼木の葉っぱになにやら電極のような専門器具を取り付けたり、いてっと身を捻る幼木の葉っぱを少し切って糊のような液体に溶かし、数種類の金属片を入れて科学反応を試したりした末に、最終的にもう一度「これは……変わった魔法植物だ」と評した。
ロブロはあまり手を出さないよう、脇で見守る事に徹していたが、どうやら検査が上手くいっておらず、やたらと時間がかかっている事は見ていて分かった。
フランは短い髪をわしわしとかいて、なぜ上手くいかないのか、といったしかめっ面で謎の植物を指差していた。
「まいった、《セルロース紋章群》がまるで見当たらない。なのに魔力があって、回復や成長だってしている。なんでだ？　訳が分からないな……」
よくは分からないが、ロブロは先日から不安に思っていた事を一応聞いてみた。
「な？　生物兵器なんかじゃないんだろ？」
フランは首を振ると、そこに存在する事をじっくり確認するように謎の幼木を指差した。
「生物兵器どころの騒ぎじゃないぞ、これは。《セルロース紋章群》を使わない《無属性種》というのは、育て方や掛け合わせによっ

て確かに生まれる事はある。
けれど、祖先由来の紋章群の痕跡のようなものが必ずどこかに残されているはずなんだ。それが、全くない。
……こいつは、魔法植物の系統樹のどの系統にも属していない、完璧な無属性。あってはならない種、根源種、まったく、未知の種なんだ」
フランはふうむと唸って幼木とにらみ合い、幼木はふふんと誇らしげに幹をそらしていた。
手持ちぶさたに傍から見ていたロブロも、少し満足げに笑った。
「そう言えばフラン、お前はただの花屋なのに、どうしてそんなに魔法植物に詳しいんだ？」
「一応、大学で魔法農学を専攻しているからな」
彼はそんなことよりも、幼木の事が気になって仕方がない様子であった。
「それとお前、水は何をやっている？」
「これで」
ロブロが魔法のポットを高く掲げて見せると、フランは眉をしかめた。
「清水精製装置？　ちゃんと定期検査をしてるのか？」
「さあ？　公民館の備品だからな。分からない」
「長いこと使っていると魔石が水に溶けだして、微量に含まれていたりするんだが」
そう聞いて、ロブロは思わずぶっと水をふいた。
「それはまずいのか？　体に毒なのか？　死ぬのか？」
「落ち着け、そんな事は分からん。毒になるかも薬になるかも。何が起こっても不思議じゃないのが魔法というもんだ。とにかく、王都なら上水道の方がまだ安全だから……」
ちょうどその時、本部のドアがノックされた。
「こんにちわ、団長さん」
香ばしいパンの香りと共に部屋に入ってきたのは、バケットを腕

に提げた茶色い髪の乙女であった。
「あら、フランさんも。こんにちわ」
フランは微笑みの光度を十倍に増しつつ、にこりと微笑みかえすと、テーブルに軽く片手を添え、十センチくらい背が高く見える不思議な魔法を発動した。
この魔法はどんな魔導書にも載っていないが、山頂に気高く咲く水仙の花を強くイメージすることで発動する花屋の奇跡なのだそうだ。
「やあ、リサさん、奇遇だなぁ。パンを抱えた君は今日も一段と美しい……」
彼がもう一つ、どんな魔導書にも載っていない魔法を発動しようとしたとき、ロブロのお腹の虫が無遠慮にぎゅるると鳴った。
「いかんいかん、昼食がまだだった」
「あら、ひょっとして私いいタイミングに来ましたか？」
一同は賑やかに笑った。行き場を失った微笑を浮かべつつ、フランは話を切り出した。
「ところでリサちゃん、何か用があるのか？」
「ああ、そうでした」
彼女の背後に、ちらちらと光の燐粉を飛ばしてはためく羽根のようなものが見えた。
フランはゆっくりと地上に着地し、不思議な光景に声も出せずにいる。
その傍らで、ロブロは腕を硬く結んでにらみをきかせていた。
「で？　樹は見つかったのか？」
妖精のシーノはおずおずと顔を出した。
「……いや、この辺、大した樹がなくてさ」
「よ、よ、よ、よ、よ……」
驚愕で顎が落ちそうになっていたフランに、リサは紹介した。
「大丈夫ですよ、危険じゃありません。ただの可愛い妖精さんですから」

「せ、精霊だってば」
と訂正を入れるのを忘れないシーノ。その違いは一般人には理解できないが、彼女にとってはすごく重要なことのようであった。
フランは息を殺して、目を擦ったり窓の外を見たりして、光り輝く精霊に見入っていた。
「ついでにこちらどういう精霊さまで？」
「つい先ほど公園で寂しそうに……いたたた」
シーノが恥ずかしそうにリサの髪の毛を引っ張って、リサは出会いの内容を思いっきりかっとばした。
「とにかく偶然出会ったんですよ。この方はその木の守護精霊さんだそうです」
シーノは白くなるくらい唇を噛んで、ぎゅっと拳を硬く結んでいた。ロブロは先ほど出て行く前と後で、彼女の内面に微妙な変化があったのを感じとった。
なにやら湿っぽくなってきた空気を打ち消すように、リサがぱしんと手を打った。
「そうだわ。今日はみなさんとお食事会をしましょう。人数も多いし、楽しい食事会になりそう」

＊＊＊

最初は三名と妖精と植物ではじめたささやかなパーティであったが、フランが途中から友達を呼んできて人数が一気に膨れ上がり、始まって間もなく騒ぎを聞きつけた近隣住民が食事を持ち寄って集まり、とても賑やかなものになった。
流しの老音楽家のアコーディオンにあわせて幼木が楽しそうに体をゆすって、フランの饒舌なトークに女性陣がうっとりと微笑み、ちゃっかり姿を現したステファンがご馳走に喉を詰まらせたのか、大いにむせ返っていた。
「むかしよく遊んでいた森がなくなっていて、ショックだったんで

すって」
「むかし遊んでいた森？」
「ええ、王都の外にあったみたいなの」
リサはあえて深刻な顔を作らずに微笑みながら言った。
ロブロは記憶を探ってみた。この辺りで無くなった森と言えば、妖精が出るという噂の灰の森、鹿の隠れ家の山林、フルソマの森、過去視の泉周辺、ざっと思いつくだけでもこれだけの森が消えてしまっていた。
近年、ゼフス王国では農地を拡大するために大規模な土地改良が行われており、南西部にあった森の大部分が伐採されている。樹齢百年の木など、もうゼフスのどこにも無かったのだ。
大小の森がいくつも焼き払われた事実を知って、非常に大きな衝撃を受けたに違いない。
ロブロは彼女の気持ちが理解できて納得したと同時に、不思議にも思った。
生まれたばかりのあの木の精霊が、どうやって七年前の森で遊んでいたのだろうか？
「木の精霊ってーのは木が大地に根付くと同時にこの世に生を受けて、枯れると同時に消滅するか弱き存在なの！　だから俺様か弱いの！　どっちも同じくらい丁重に扱え！」
という由の事を彼女から口すっぱく説明されていた気もするのだが……。
「精霊の世界というものは、どうも複雑な仕組みがあるみたいだ……」
リサはナイフをかちゃりと置いて、とつぜん恐い顔になって言い寄った。
「そう言えば先日、お茶にお呼び致しましたのに、おいでなさいませんでしたよね？」
「あ、いや……その日は丁度……」
ロブロはぎくりと顔をこわばらせた。そういえば先日、エンシア

夫人にお茶に誘われていたのだ。
あの日は夜警のついでに夫人の屋敷にも寄ろうと思っていたのだが、獣臭い狩人の格好で食事の席に出るのはさすがにまずいか、と途中で気づき、着替えを取りに本部に戻ったのだ。
そうしたら、丁度鉢植えにシーノがいて、二匹のテントウムシと格闘していた。
それでその晩はそれどころではなくなってしまったのだ。という由の事を詳しく説明した。
リサは懸命に説明しているロブロを見て、何がおかしいのかくすくすと笑っていた。
「そんなにおかしいか？」
「忘れてしまいますよね、あんな可愛い子が突然目の前に現れたら」
「あたりまえだろう、普通、妖精を目撃してしまえば、自分がおかしくなったと思わないか？」
「あら、私、小さいときから普通に遊んでますけど？」
「いやそれは普通じゃない普通じゃない」
「普通ですよ？　じゃあここにいる皆さんに……あら、シーノさんどこに行ったのかしら？」
見ると、パーティ会場にシーノの姿だけがなかった。ロブロは嘆息をついて立ち上がった。

＊＊＊

ロブロも森の狩人である。親しみ慣れた森がなくなる事の恐ろしさ、寂寥感を理解できないわけではない。出来ることならば、滅んでしまった森を元に戻してあげたかった。けれどもそれは一介の狩人には実現できぬ夢である。
狩人は森に住む生き物たちと同じで、森が無くなれば森と共に絶滅するしかない、今の時代には向かない希少な存在なのだ。

シーノはひとり二階の窓辺に腰掛け、物憂げに外の町並みを見つめていた。紅を含んだような空気に、家路を行く人々の賑わいが溶け込んでいた。

「私が子供のころ、父が教えてくれた民話があってな」

大したことを言うつもりはなかった。ぐうぜんふと思い出しただけだ。

「森と大風が、双子の兄弟だという話だ。大風の神様は足を持たずに生まれて、世界との接点を持たずにさまよい続ける運命にある。森の神様は多すぎる足を持って生まれて、その場から全く動くことが出来ない運命にある。

風の神様は動く事の出来ない弟のために、遠くの花や鳥を運んできて、森の神様は地面に立つ事が出来ない兄のために、沢山の葉を茂らせてそれらを守っているんだ。

この話の言わんとしていることはだな、要するに……」

「ねぇ、煩いからちょっと黙っててくんない？」

棘のある声でシーノは言った。やはり女性には狩人の話など退屈なものかもしれない。もとより自分が話し相手に向かない事を自覚しているロブロは肩をすくめた。

「戦争が終わるまでの辛抱だ。戦争が終わりさえすれば、お前を故郷に返してやる」

「……いいよもう、帰るの面倒になったし」

どうがんばってみても、シーノは元気を取り戻してくれそうになかった。ロブロは諦めて、魔法のポットに水を飲みに向かった。

「気を落とすな。少なくとも、これから話し相手には困らなくなりそうだからな。フランも月に何度か往診してくれると言っていたし、明日からリサも木の面倒を見に来てくれるそうだ」

うざったそうに、不満げな目をこちらに向けてくる。その耳が嬉しそうにぱたぱたと羽ばたいたのを目ざとく見つけて、ロブロは苦笑した。

「……あのけしからん乳のお姉ちゃん？」
「なんだその言い草は」
口元に持って行きかけたグラスをぴたりととめて、ロブロは精霊を直視した。
「お前の木を心配して申し出てくれているんだからな、少しは感謝したらどうなんだ」
「へぇ～。木の事が心配なのぉ～？　それはどうだろうねぇ～？　なんか他に目的があるんじゃないのぉ～？」
シーノは小ばかにするような笑みを浮かべて、体を前後にゆすった。
本当は彼女が落ち込んでいるから話し相手になりたい、と言っていたのだが、プライドが傷つくだろうのでロブロはその事は言わずに我慢した。
どんなに落ち込んでいても、いたずらをする時は途端に元気になる、妖精族の本領が発揮された様子である。
「いいか、シーノ。ここは自警団本部だ。皆の好意でお前はここに居させてもらっているんだぞ。くれぐれも、悪ふざけをして市井の人たちに迷惑をかけないように。分かったな」
「あい。ところでさ、料理まだあるの？」
シーノはご機嫌に笑って、敬礼を返した。
「お前が食べる分が残らないはずはないだろ？」
「ひゃはははは っ」
どうやらすっかり元の調子を取り戻したらしい、光の尾を引いてしゅるんと飛んでいってしまった。
ロブロはなんだかまともに取り合っていたのがバカらしくなってきて、肩をすくめた。妖精とまともにやりあってはならない。彼らは生まれながらにそういう種族なのである。

ケヘン（小暑）の1日、台風

その日は朝から雲行きが徐々に怪しくなってゆき、昼頃には遠雷がとどろくようになった。

サンシャイン通りの自警団団長ロブロは、部屋の隅にひっそりとあった小机を真上からじいっと見下ろしていた。レース模様の白いシーツが敷かれ、装飾用のお皿が一枚立てられているだけの簡素な小机である。

なにが気になるかというと、今朝、巡回に出て行く前と微妙に位置が変わっているのである。ロブロはその白いシーツの端を掴んで、位置を微調整していた。

リサが自警団本部にやってくるようになって、木の世話とついでにシーノの話し相手をしてくれているらしいのだが、さらに頼んでもいないのに本部の掃除をしていくらしいのであった。

これまで身の回りのことは何でも一人でやってきた狩人は、自分の縄張りの様子がいつもと違っていると本能的にそわそわしてしまう。

熊のようにうろうろと歩き回っている様を、自称木の精霊であるシーノは、窓辺の鉢に植えられた幼木の上から観察していた。

「ロブロ、やっぱりあったよ、別の理由」

「なんだ、まだ彼女の話をしているのか？」

古びたソファを定位置に押しやりながら、ロブロは返事をした。

「そんなに裏表のある人じゃないと思うがなぁ」

「お前、鈍感だからわかんないんだよ。お前には恥ずかしいから言えないんだってば、きっと」

手を口の脇に立てて、確信をもった口調でこうささやく。

「きっとさ、自警団に入れてもらいたいんだよ」

真剣な表情で本棚の本の配列をチェックしていたロブロは、とたんに相好を崩して大いに笑った。

「がっはっは、それは頼もしいな。入ってもらいたいのは分かるが、彼女にはお屋敷の仕事があるから無理だろ。いつ主人の声がかかるかもしれないのに、夜警なんてとても出来やしないだろう？」
けっして弱そうだから無理だろうとは言わないのがロブロだった。彼にはそこまでのデリカシーはない。
シーノはむんと唸って首をかしげた。
「俺はあんまり人間の仕事はしらないけどさ、お屋敷の方はオイトマを出されたから心配いらないって言ってた。時間はいくらでもあるってさ」
シーノは言ってから、頭の少し上あたりに焦点を結ぶように眉をきゅっとひそめた。
「ねぇ、オイトマってなに？」

＊＊＊

午後になると風が吹き始め、王都は凄まじい暴風雨に飲み込まれた。南海からやってくる毎年恒例の台風である。
大水路から絶え間なくあふれ出る水の中にしっかりと立ち、ロブロはランタンの光を可能な限り遠くまでかざした。
彼の元に、白いレインコートを着たフランとステファンがやってきた。
「見つかったか！？」
「親分、もう無理でさぁ！　この嵐の中じゃ何も見えねぇ！」
「しっかり探せゴルァ！　リサちゃんに何かあってみろ、ただじゃおかねぇからな！」
気丈に振舞いながらも、フランの顔は蒼白であった。ロブロの顔にも次第に焦りが見え始めた。
雷鳴が轟き、ステファンが悲鳴に近い声を上げた。
「おおお、親分、もう限界ですぜ！　いったん戻りましょう！」
こんな嵐の夜に、リサは一体どこに行ってしまったというのだろ

う。エンシア夫人の屋敷を訪ねても明かりひとつなく、人が居る気配すらなかったのだ。
　ロブロは唇を噛んだ。どうしてこんな事になってしまったんだ。彼女ほど優秀な侍女が、どうして何も告げずに突然居なくならなければならなかったんだ。そして彼女はこんな台風の最中、一体どこに消えてしまったというのか。
「もういいロブロ」
　思い悩む彼の肩をフランの手が掴み、ロブロははっと息を呑んだ。花と乙女にしか触れさせないと豪語していた白い手であった。
「リサちゃんには言うなって口止めされていたが、教えてやるよ……。彼女はお前の居ないところで、ずっと以前からこう言っていたんだ、『お前がクマなみに鈍いから困る』ってさ」
　思いも寄らぬ言葉に、ロブロは目を丸くした。
「それは一体、どういう意味だ？」
　じれったそうに顔をしかめて、フランは正直に言った。
「エンセル夫人がお前に惚れてるんだよ！　バカ野郎！　お前のせいだ、お前は夫人を避けて、いつもリサとばかり話をするそうじゃないか。だから彼女は夫人に嫉妬されていつも困っているんだ、俺にそう言ってきたんだよ！」
　こんな時に何の冗談を言うのかと、ロブロは苦笑いを浮かべた。
「おいおいフラン、それは思い違いも甚だしいな。エンセル夫人は既婚者だぞ？」
　フランは目をむいて息を呑んでいた。山に帰れこのくそ田舎者が！　と罵声を浴びせそうになるのをすんでの所でこらえていた。
「ロブロ、ようやく分かった。お前は危険すぎる。もはやお前のそれは犯罪だ」
「犯罪だって？」
「人は誰しも、知らず知らずのうちに罪を犯している事だってある。自分の身は潔白だと信じていても、気づかないところで他人を傷つけたり、嫌な気分にさせたり、損をさせていたりするんだ……。

いいか？　聖書でも言ってる、『自分の罪深さを自覚して注意深く生きること』、これが肝要なんだ。無自覚こそが一番の罪だと思い知れ。

……特に、自分がモテているのにそれに気づかないような、度を超して純朴な男子は、最終的に地獄に落ちる運命だとな！」

「一体なにを言っているんだ？」

切迫した表情で必死に訴えかけるフランに、当惑したロブロの目は釘付けになっていた。水しぶきが二人の男の対照的な顔を叩いていた。

「ロブロ、お前はついこの間、角のパン屋でパンを買ったとき……そのパンを買いそびれた貧しい親子が飢え死にした事を知っているか？」

「……えっ？」

「ついこの間、お前に恋をしたがために恋敵から迫害を受け、世を儚んでアムズ河に飛び込み、自ら命を断ったとある可憐な少女の事を、お前は知っているのか！？」

ロブロは驚愕に身を震わせて何も答えられず、ただ首を振った。フランも静かに首を振った。

「俺だって知らないさ。けれども、『いるかもしれない』。そうだろ！？」

隣のステファンが怪しい騙し絵を見るように眉をしかめてフランを見ていた。それでもフランはロブロだけに視線を注ぎ、わが事の様に熱く語り続けた。

「わかるか、無いことの証明はできないんだ。いいか、お前の心がはっきりしてさえいれば、こんな無駄な争いは起こらずにすんだんだ！　お前が毎朝お前のためにパンを作ってくれる女性と結ばれて、身を固めてさえ居れば……！　そうすれば、貧しい親子だって、可憐な少女だって、リサだって夫人に嫉妬されることも無く、毎日平和にパンを買って暮らせたはずなんだ！」

「そんな」ロブロは衝撃で言葉を紡ぐのも難しそうであった。「ま

さか私のせいで……」
「正直に言うと大学時代、俺には五千人のファンが居た！」
隣のステファンがますます訝しげな顔をしていた。
フランは彼に背を向けて、氾濫する川に立ち向かい、大嵐の中で痛切な叫びをあげた。
「正確に言うと『いたかもしれない』だ、　けれども俺は俺のファン達が無駄な争いを繰り広げたりしないよう、彼女たちの命を救うためにその中の一人、ルイーザを選んで結婚したんだ。
……ああ、後悔した事だってある！　はっきり言って若気の至りだったかもしれない！　けれども、これが我々のあるべき姿、自然の摂理なんだ。
いいかロブロ、今からでも遅くは無い！　お前も浮ついていないで、早く誰かと身を固めるんだ、すべてが手遅れになってしまう前に！」

＊＊＊

嵐の中を自警団本部まで戻った一行を、いつの間にかそこに居たリサが出迎えた。
「あら、みなさんお揃いで」
などと言って、ずぶ濡れの三人をその場に凍りつかせた。
詳しく問いただしてみると、お暇を出されたというのはエンセル夫人が長い間家を空けるから、その間休暇がもらえたということのようだ。
「台風の準備をしてからここに来たんですけど。団長さんと行き違いだったと聞いてずっとここで待っていたんです。お邪魔でしたか？」
「いや、お邪魔も何も……」
三人はリサの細い首にしがみついているシーノを注視した。
羽根はすっかり生気をなくして真っ白になっており、心なしか足

が震えているようにも見える。
「べっ、べつに役割さぼってた訳じゃないんだぜ！　リサが一人じゃ、こ、心細いじゃねぇか！」
鎧戸ががたがたと音を立てるたびに、シーノは「もうだめだこのボロ屋おしまいだー！」と言って顔を伏せた。
台風が毎年の行事であるゼフスの住民たちは、揃って呆れ顔をしたり苦笑したりしていた。
そんな中でただ一人、ステファンはいぶかしげな顔をしていた。
「み、みなさん……いったい誰と話しなさってるんで？」
実は彼には妖精が見えていなかった……とは、そのとき誰も知るよしはなかった。

ケヘン（小暑）の2日、晴れ

朝方には台風も通り過ぎ、ロブロは遠出の準備をしていた。
いつもの見廻りとは違って、今回は狩人の格好をしていない。熊の毛皮で織った丈夫なコートに身を包み、脛まで覆う頑丈なブーツの紐を一本一本きつく縛っている。
「ステファンが来るから心配するな、何かあったら隣町の自警団に連絡をするように」
「俺の成長見ていかないの？　見てこれ、すごい綺麗な花が咲いたよ！」
謎の幼木を見ると、柔らかい葉の間には控えめな白い花が芽吹いていた。シーノは花をつなぎ合わせて冠や首飾りにして着飾っていた。
ロブロはつくづく不思議な木だと思った。
「ところで、お前は何という種類の木なんだ？」
木に対する質問としてはあまりにもばかげていたので、ずいぶん後回しになった。シーノは綺麗な花に囲まれて上機嫌で言った。
「ん？　これ？　これは《世界（ユグド）》……あ」
出かけた言葉を飲み込んで、シーノの目は一瞬丸くなり、気まずそうに宙を泳いだ。
「えーと、《薬草（リーフ）》」
「《世界薬草（ユグド・リーフ）》？」
「そうそう、それ。《世界薬草（ユグド・リーフ）》！」
それいい、そのアイデアいただき！　と言った感じの不自然な相槌をうつシーノだった。
ロブロが思いっきりいぶかしげな目を向けていると、シーノも目に力を込めて視線を押し返した。何があっても宣言撤回しない構えである。
「ん？　ひょっとしてそこのクマちゃん、信じてないのか？　よー

し、だったらお前の旅のお供にちょっとばかり持っていけばいい！
すっごい薬草だかんな、効き目抜群、死人だって蘇るぜ！」
「……まあ、別段疑って得する訳でもないからな」
挑戦的な態度のシーノをじっと見据えながら、幼木の根元の土を慎重に取り除いてやった。つい先日、大き目の鉢に植え替えたばかりなので、掘り返すのは簡単だった。
「えっ、ちょっ、お前……。何やってんの？　全部持ってく気か？」
シーノが慌てるので、ロブロは言ってやった。
「なにって、普通こういう幼木系の薬草は葉っぱがまだ成長しきってないから、《樹皮》か《根っこ》を使うと相場が決まっているだろう？」
「えっ、お前、なんでそんな大雑把な薬草の知識で狩人やってんの？　えっ、マジで？　マジでそっち切るの？」
何をやっているのか不思議そうに見ていた幼木が、ロブロがナイフを取り出した瞬間、びくっと震えたように見えた。
ロブロは黙々と作業を続けた。三本の主根の他にもいくつか脇根が生えていたので、それにナイフをあてがった。幼木はぶるぶる震えて怖がっているみたいだった。
木の守護精霊のシーノはごくりと唾を飲んでその様子を見下ろしている。彼女をちらりと見やって、ロブロは尋ねた。
「痛くないか？」
シーノはむうと唸ったが、適当に答えておいた。
「ちょっとエチレン・ガスが出るけど死ぬほどじゃない」
「ふむ」
ロブロは安心して、中ぐらいの太さの根に慣れた手つきで刃を食い込ませた。

ぐさっ。
「ぎいゃあああああああああはははははははっはは！」

驚いて手を引っ込めたロブロの表情を見て、木の上の守護精霊は足を放り出し、けたけたと腹を抱えて笑っていた。
――からかわれただけのようだ。
ロブロは笑い声を無視して、手早く根っこを切り取った。

＊＊＊

薬草の作り方は自己流だが心得ている。土の汚れを取って天日で乾燥させて、煎じて十分柔らかくなったところで油分を布でこし取る。
本当に雑なものなので、ステファンが来る前に半時間ほどで手早く終わらせてしまった。
一本の根っこから取れた油分は、一回顔に塗ればそれで終わってしまうぐらいの微々たる量であった。
「ところで何に効くんだ。服用の仕方は？」
「今からそれ聞くの？　べつに何にでも効くよ。いや、本当だってば。無属性だから、他の薬に混ぜたら効果が強まるかもしんないって、このまえ花屋の兄ちゃんが言ってたよ」
「なんで人づての知識なんだ？　なんかもっとこう、精霊っぽい神秘的な情報を与えてくれないのか？」
「さあ、俺も生まれたばっかりだからよく分かんないや」
けれどもフランの薬草の知識を買っているロブロはそれで納得してしまい、つぎに効果を強めたい薬がないか探した。
荷物の中にはすでに傷薬なども入っていたが、怪我がない今は効果が試せるものではないし、むやみに実験して傷薬が使い物にならなくなってしまったら非常に困る。
なにか手頃な薬はないか探していると、公民館の備え付けの医療箱に目薬があったので使ってみる事にした。
「なにそれ」
「点眼薬だ。ところで本当に何にでも効くんだろうな」

「はぁ、だから何度も言ってるじゃないか。死人だって蘇っちゃうよ。ためしにそいつを使ってみたら？」
本当にそんな都合のいい薬草があるものだろうか。少し不安になってきた。また遊ばれているような気がしないでもない。
ロブロは手元の目薬をじっと見下ろし、もういちどシーノをいぶかしげに見やって、それから意を決したようにぐいっと天井を見上げた。
目薬は容器の蓋がスポイトと一体化しており、水で薄めず適量を直接目に注す事が出来る、王都の魔法使い御用達の最新式である。
目をおおきく見開き、スポイトを高く掲げ、自分の目めがけて水滴を注そうとした、そのとき――。
「だいじょうぶ死人だって蘇っちゃうよ――一度死ぬけどね」
シーノが息を飲むのが聞こえ、落ちてくる水滴を直前で避けたロブロは、頬についてしまったそれを手で拭い、目をかっと見開いてシーノと顔を見合わせた。
シーノは大きく仰け反って、膝をばしばし叩いて大いに笑っていた。
「あ、あんた、可愛い奴だな……だから死にやしねぇっての」
どうやら、またからかわれているだけのようだった。ロブロは非常に不愉快になったが、それでももう一度スポイトを逆さまにして、再度、真っ直ぐ目に注した。
左目のちょうど中央に水滴を受けたロブロは、眼球全体が氷漬けになったようにひやりとしたのを感じた。強烈な冷気が蛇のように意思を持って眼球にまとわりついてくる。
ロブロは目をぎゅっと閉じ、思わず下を向いた。液体はじわじわと目の端々にまで染み渡って行き、熱くなった血管が急速に後退してゆくのを感じる。謎の成分がまぶたの裏側に広がって、涙があふれてくるのを感じるが、体の毒を残らず吐き出そうとするかのように心地よかった。
「どうよ、イケてるだろ」

「ああ、想像以上に効くな、これは」
今回はとりあえず片目だけにしておいた。目をぱちぱちさせて、シーノに向き直ったとき、彼女の顔が一瞬、カチンとこわばったのが見えた。
「あ……う……」
またか、いい加減にしろ。そう言いかけたが、ロブロは声に出さずにただじっと見つめ返していた。いちいち反応すると、またからかわれるかもしれない。
のしのし歩いていって、洗面所の鏡を覗いてみたが、大した変化はなかった。熊のような髭の男が無愛想な顔をしているだけである。
「あのな、あまり人をからかって遊ばないでくれ」
彼が振り返ると、シーノは肩を震わせて、ぎこちなく微笑み返した。どういうわけか、怯えられているようにも感じられた。
「う、うん。分かった」
「本当に？」
「うん、分かったよ」
こんなに素直に返事されたのは初めてだったので、ロブロは眉をしかめた。
もう一度、いつもと変わらない自分の怖い顔を見つめた。
一体何が見えたのだろうか？

＊＊＊

北の区画リオは昔から教区として定められており、台風一過の町を掃除している様々な宗派の修道者たちと道中で何度もすれ違った。
ロブロは宗教にはさして関心が無い、彼が目指していたのは北の出口である。
白黒の服を着た人々の間を大通りの端まで進むと、王都全体を覆っている薄い光の膜が、世界の果てのように立ち現れる。
一般人が魔法障壁の外に出るためには東西南北にある四カ所の関

所を通らなくてはならない。石畳の道は頑丈な石作りの砦までずっと続いており、どうやら以前より見張りが増員されているらしいのが分かる。国王軍の兵士の動きがぴりぴりしているのは遠目からもすぐに分かった。

彼らはロブロに手を向けて動きを制すると、荷物検査をするでもなく真っ先にこう言った。

「止まれ。外は今、反乱軍の鎮圧戦の真っ最中だ。一般人の通行は厳重に禁じられている」

見知らぬ兵士は苛立った口調でそう言った。通行禁止だというのは来る前から分かっていた。いつもは顔見知りの番兵が丁寧に対応してくれるので、彼ならこっそり通してもらえるかもしれないと希望を抱いて来たのだが、今日に限ってその顔が見えない。

どうやら大きな配置換えがあったようだ。関所にいる兵士の一人として見知った顔がない。

「頼む、外の様子が知りたい。カノンの森から来たんだ、向こうに知り合いがいる」

「カノンの森だと？」

ロブロの出身地を聞いて、兵士は一気に怪訝そうな表情になった。

「リョーシャ＝アシモフの知り合いか？」

兵士の口からこぼれた名前に、ロブロははっと息を飲んだ。

「ああ。そうだ。だが、どうしてその名を知っている？」

兵士は振り向くと、他の兵士となにやら目線で合図を交し合っていた。奥の兵士がロブロの顔をじっと観察して、首を横に振ったのを確認して、兵士はロブロに向き直った。

「それはお前には関係ない。ともかく、いまは我が国王軍が反乱軍を征伐している重要な時期だ。もう暫く辛抱していろ。秋になれば食い物も増えて、農民の反乱も鎮まるだろう」

＊＊＊

ロブロはそのまますごすごとひき下がった。もう暫くの辛抱だと言われては仕方が無い。
フランに『身を固めろ、結婚しろ』と言われてから、彼はずっと考えていた。
孤独な狩人にも、この人こそは、と思う女性がいない訳ではなかったのだ。しばらく帰っていない彼の故郷には親しい間柄の女性も居たのである。それがリョーシャ＝アシモフであった。

ロブロは自警団員にされるまえ、かつて森の奥にあるボロボロの小屋に住み、まったく人に交わらない生活をしていた。
村人には今でも彼の事を恐れている人の方が圧倒的に多い。にもかかわらず、彼女はそんなロブロとも分け隔てなく接してくれた女性だった。
ある日突然ドアを蹴破って、ワンルームの小屋に盗賊のごとく颯爽と現れたのが彼女だった。隅っこに慌てて頭を突っ込んだクマのようなロブロがびくびく怯えていると、野菜かごで両手のふさがった若い女性が小屋の中をぎろりと睥睨していた。
彼女は狩人を見つけるや、「村が不作で悩んでいるので、小麦と肉を交換してもらえませんか」と言った。
そのとき村が食料難であった事をはじめて知ったロブロは、命乞いをするようにありったけの干し肉と毛皮を野菜かごに乗せると、小麦は「調理が面倒なのでいらない」と言ってただで帰した。
女性は来たときと同じく颯爽と去っていったので、いい事をしたなと思ってひとりほくほくしていると、後日、しなびた野菜を籠に入れてやってきた。
無論、両手がふさがっているのでドアを蹴破って登場した。また逃げ惑うロブロに対して、「野菜も食べなさい」そう言って肉のお代として置いていったのだった。
村が食料難だというのにこうした義を通す所は断固として通す、稲妻のようにきびきびと歩く姿が印象的な女性だった。

やがて村の様子が気になって顔を出してみたり、手ぶらでは気まずいので獲物を持ち寄ったりした。
そのようにしてロブロの生活は次第に森から離れてゆき、今では王都に毛皮を売りにくるまでになった。彼女が現れなければ、ロブロはいつまで経っても森の中でひとり孤独な生涯を終えていたに違いなかった。
リョーシャは彼と違って垢抜けていて、物怖じせず自分が正しいと思うことをして、薬草の使い方も上手だった。
むろん思い上がりも甚だしいかもしれないが、彼が結婚するのならば、彼女しかいないと思っていた。というより、他に思い当たる女性がいないのだ。
そう思っての遠出であったが、結局王都から出ることも出来なかったのである。
「……収穫祭まで待て、か」
知らずにため息が大きくなった。収穫祭に収穫ができないから、彼の村は食糧難になったのだ。その事をこの狩人は知っていた。

＊＊＊

自警団本部のドアを開けると、上半身が裸の女性が立っていた。金色の長髪をかきあげ、彫像のような肉付きのいい背中を彼に向けている。
おいおい、お前が成長してどうするんだよ？
思わずシーノに対して突っ込みを入れたわけであったが、なぜか声が出せなかった。
彼女の前には、椅子に深く腰掛けたステファンがいた。にやけた顔で彼女を見上げているのを見て、急に怒りがこみ上げてきた。
おい、一体何をしているんだ。ここは自警団本部だぞ。
声に出して怒鳴ろうとするが、上手く声が出せなかった。不思議に思って喉に手をやろうとするが、その手もずっしりと重い。

水銀の中を動いているみたいだった、動かすと指周りに不思議な空気の層が生まれた。
さらに不思議なことに、よく見ると、ステファンの手から三十センチぐらい離れたところにリンゴが一個浮かんでいた。
それ、一体どうやっているんだ？
椅子に腰掛けた子分の顔を見やっていたが、ステファンは銀歯を見せてにかっと笑ったまま、まるで写真のようにぴたりと静止していた。
部屋全体が停止しているように見えた。そのうち、三呼吸ぶんくらいの間があって、突然早さが元に戻った。
ロブロの脇で、ばあんという、耳を劈くような大きな音がした。
二人ともその大きな音に飛び上がり、女性は今しがた彼に気づいたように振り返って叫び声を上げ、ステファンは放り上げたリンゴを取りそこなって仰向けに椅子から転げ落ちた。
「いててててっ！　お、親分っ！」
よく見ると、女性は近所の床屋の娘さんである。体を隠しながら、礼もそこそこロブロの脇をそそくさと通り抜けて出て行った。
子分は椅子の陰に隠れながら、再び卑屈に笑った。
「えっへっへ、いやいや、これには深い事情がありまして、決して留守番をサボってたわけじゃなくて……そ、そうだっ。そんなことより親分、てぇへんな、てぇへんな話がありやして、へぇ！」
「さっきの……」
振り返ってみると、さっきの音はどうやらドアが壁にぶち当たった音のようだ。どんな勢いで開いたのか、壁の一部がへこみ、ノブが外れて辛うじてぶら下がっていた。
一体何が起こったのか？　今のはなんだったのか？
そればかり不思議に思っていると、窓辺の方からなじるような声が浴びせられた。
「あ～あ、せっかくいい所だったのにぃ～」
幼木の葉影から、シーノがひょっこり顔を出したのである。

「また……」
こいつの悪戯か。ロブロは顔を赤くして、やり場のない怒りで肩をふくらませ、そして一気に下げた。
「ステファン、大変な話というのは？」
「へぇ、へぇ。さっき隣町の自警団がいらしたんですよ。それで言ってたんですがね。つい最近、王都に魔物が出るようになったらしいんでさぁ！」
自警団員の話によると、隣町を歩いていた女性が未確認の魔物に襲われたそうだ。ロブロは眉をひそめた。
「魔物だって？　盗賊の類ではないのか？」
アーディナルの魔物はこの千年にわたって弱体の一途をたどっている。今では人里離れた場所か、前人未到の領域ぐらいにしか生息していない。
ロブロの住んでいた森でもお目にかかったことが無いのである。キツネが出ただけで騒ぎになる王都で、一体なにを言っているのか。
「いえ、それが人の仕業じゃあないみたいです。死体の検分によると、どうやら古い魔物の仕業かもしれないとかなんとか言ってました。
親分が外出していると言ったら、とにかく、この街でも気をつけるようにと言って出て行きました、へぇ」

＊＊＊

『気をつけるように』と言われたところで、サンシャイン通りの自警団にできる事といえばたかが知れていた。
頼りない子分を脇に従えて、いつも以上に慎重に夜警を行うだけである。
「お前も若いし、好きな女がいる事はかまわん。だが、自警団本部を引き込み宿みたいに使う事はもうするな。そもそも、あそこはこの町の住民たちが寄付金を出し合ってだな……」

ロブロは先刻のステファンの振る舞いに対して、いつまでも愚痴をこぼしていた。
ランタンを持ったステファンは萎縮してしまって、小さな声でへぇ、へぇ、と返事をしていた。シーノが肩に乗っかってきて、ロブロの耳を引っ張って喚いた。
「いーじゃんか、本物の宿は金がかかるんだよっ」
「いてて、何でお前がステファンの援護をする？　そもそもお前は、あんなものを見て何が楽しいんだ？」
「あれよ、知的好奇心という奴よ。お前も見ときゃよかったのにさ。嫁さん貰ったら将来必要になってくるかもしれないだろ？　そういう知識がさ」
「はっ、番になった雄と雌がどうすべきかくらい、森で生活していたら大抵分かるさ」
「あー、分かっちゃいないね。お前は全っ然、何にもわかっちゃいない」
ステファンの方をちらりと見ると、彼は変なものを見るような目つきでロブロの方を見ていたが、慌てて前の方を向いて歩いた。
「い、いやぁ～、いい月夜っすねぇ～。おおっ？　あの星はなにかなぁ～？」
などと独り言を言って、ロブロから逃れるようにふらふらと道の端を歩いていた。
「何あれ、変な奴」
くだらない話をしながら夜の街を練り歩いていた時、三人は同時にその場に立ち止まった。
暗闇から悲鳴が聞こえてきたのである。
辺りは嵐のもたらした水溜りやゴミが散乱しており、魔法障壁が重たいガスのように空を覆っている。
その通りに、一度だけではない、二度、三度。生命を振り絞るような悲痛な叫びだった。
ようやく事態を把握して、真っ先に駆け出したのはロブロだった。

「ステファン、お前は隣町の自警団に連絡しろ！」
肩に掴まっていたシーノが、ぐぎゃっ、と短く叫び、マントを掴む手にさらに力を込めた。
ステファンはがくがく震えていて、情けない声を振り絞った。
「お、親分っ！　無茶だ、たった一人で魔物に勝てるはずがねぇ！」
だがロブロの決意は揺るがなかった。平和な森でも、生きているうちに狼や熊と出くわす事もある。それらの経験が彼に大きな自信を与えていた。
先へ先へと急ぐ意識に反して、思うように動かない鈍重な体がうっとおしい。百歩も走るとさっそく息が切れ始めた。
頼りにして走っていた悲鳴は徐々に小さくなっていく。おまけに、信じられない速度で右に左に街中を移動していて、どちらの方向に走ればいいのかさえ分からない。
足元に引きずった黒い血の跡がべっとりとついているのを発見して、ロブロも理解した。これは明らかに人間の仕業ではない。地面を走っていた血の跡が、途中から壁を走っている。さらにそれは屋根の向こうへと消えていた。
途切れ途切れの血の跡を懸命にたどり続けていたロブロは、ふと思い当たって立ち止まった。
この血の跡……このままこの通りを真っ直ぐ行けば、魔法障壁に突き当たるはずだ。
「おいロブロやめてくれよいやだよ、俺お前が食われるの見たくないよ！　頼むから……ぎゃあっ！」
わあわあ喚いているシーノを掴んでマントに隠し、ロブロは横道に身を隠した。
被害者の悲鳴はもはや聞こえない。辺りは静まり返っている。
だが、ロブロは確信を持っていた。獣は必ずこの道を引き返してくる。彼は狩人の勘で、《獣の行動》を先読みしたのである。
ボウガンを手に取り、矢をつがえ、武器の準備を整えた。弦を引く手が震えている。なにせ今度の相手は獣ではない、魔物なのだ。

魔物と獣の線引きは難しいが、魔物の類は生物の原理から外れた獣だと考えられている。
普通、生物は生殖行為によって個体数を増やしていくものだ。魔法使いの塔では彼らを追跡調査し、個体数をどうやって維持しているのかの解明が試みられたが、結果、彼らは『全く繁殖しない』という事が確認された。
数を増やすどころか、少しずつ減少しているというのだ。では、どうやってこの世に生まれたのか？　全くもって不明なのだ。生物の尺度では把握しがたい存在、それが魔物という獣だ。
ロブロは青銅の蓋を閉じてランタンの光を覆い、明かりを消した。弦を限界まで引き絞ったまま、矢の先端を表の通りに向け、顎をあてがい、じっと息を潜めた。
やがて、遠くから地を駆る獣の息と足音が聞こえてきて、シーノがマントの中にもぐりこんできた。
「くる……くる……くる……」
どうせ一発では倒せない。脅して、相手を追い払う事さえできればよかった、被害者の身柄を確保することさえ出来ればいい。
音を頼りに、魔物の足取りを感じる。もうまもなく目の前を通過ようとしていた。
息を潜めて集中していると、彼の右手の指はあるとき、自然に引き金を引いた。ボウガンの弦が頬の前でぶるぶると震えた。
弾かれた矢は、透明な管を通ってゆくように滑らかな軌道を描き、表の路地にすっと吸い込まれていった。
そのタイミングは早すぎたようにも、遅すぎたようにも感じられた。
矢が闇の中に消えていった頃、ちょうど通りに、黒い影がのっそりのっそりと姿を現した。人影だった。何か大きなものを引きずっているように見えた。倒れている人だ。
ロブロは彼に声をかけようとした。だが、何故か声が出なかった。

ただ。

またさっきと同じだ。まわりの時間の流れがやけに遅い。

その人影は人を引きずりながら、何事もなく彼の前を通り過ぎようとするかに見えた。息を殺して見守っているうちに、その肩に、ようやく彼の放った矢が突き刺さった。

バシュゥゥっ！

そして、獣じみたおぞましい咆哮に弾かれるように、全てが元の速度に戻った。

咆哮をあげた人影はぐるぐると回転し、身をよじって地面に倒れ付した。

しかし、すぐに矢が飛んできた方向に対してすばやく身を翻し、トカゲのように四つんばいになった。

暗闇に白く浮かぶ鋭い牙をむいていた。魔物だ。

引きずられていた被害者の体は勢い余ってぶわりと宙を飛び、路地を石のように滑っていった。

被害者が無事かどうかはわからない。彼の腕は地面に力なくだらりと放り出されている。とにかく、矢は魔物に当たったようだ。

正気を取り戻したロブロが路地から立ち上がると、魔物はたちまち猛獣のような唸り声を上げた。

石畳をばりばりと爪でひっかき、暗闇に浮かび上がる赤い瞳をぎらぎらと輝かせている。被害者との間にいて、うかつに手を出せない。駆け寄ろうとすれば即座に襲い掛かってくるに違いない。

だが、根気比べはロブロの勝ちだった、魔物は第三者の出現に簡単に獲物を手放してしまったのだ。なかなか知能はあるようだ。

魔物は異様に長い手足をバネのように使って飛び跳ね、窓の桟やレンガの出っ張りを利用して、するすると屋根の上まで登っていった。

そして姿は見えなくなった。思いのほか巨漢であったロブロに怯んだのかもしれない。
ボウガンを下ろし、ランタンの蓋を外して明かりを取り戻した。急いで被害者の元に駆け寄ったが、どうやら救出は間に合わなかったようだ。
二十代後半の男性で、こんな夜更けにどこに向かおうとしていたのかは分からない。手には紙切れのような物が硬く握りしめられていた。二匹の絡み合う蛇のシンボルに、持ち主の血がべっとりとついている。「光を」という文字が、何かの願いを込めるように書かれていた。
泣き声が聞こえてきたので、マントをめくってみると、シーノは彼の胸にしがみついてぶるぶる震えていた。
「そんなに怖がるんだったら、もう帰っていいぞ、本部の番をしていろ」
「う、う、うるさいっ！　見てろ、満月さえ出ていればあんなしょぼい魔物なんて、俺の魔法で、一撃なんだからなぁ！……」
目に涙を浮かべたシーノは、ロブロの背後を見て真っ青になって、突然甲高い声で叫んだ。
「きゃあああ……！」
振り返ると、大きな猿が彼に飛び掛ってくるところだった。
ちがった、森にいるようなただの猿ではない、『仮面』をつけている。ランタンの明かりにぼんやりと照らし出された白い陶器の仮面は、本能的に恐怖を感じさせる火のような紋様を描いていた。
ドングリのような丸い穴の奥で、赤い目が夜目の効く獣のように強い光を放っている。仮面をつけた獣だ。
両腕を大きく振りかざし、その体毛の先端からはガラス球のような水滴が扇状にほとばしり、獣の背後にある屋根から続く長い軌道を描いている。どうやら、屋根の上を巡ってロブロの背後に回り、不意打ちを狙ってきたらしい。
あんな鋭い爪でしがみつかれては、ひとたまりもない。動け。動

け。再び遅くなった世界で、ロブロは筋力の力を振り絞るように、懸命に自分の体に命令を発した。
手首から先は黒い皮膚がむき出しになり、岩にしがみつくようにかぎ状に開かれた長い指からは、かぎ状に曲がった第一間接ほどの長さもある爪が伸びている。
泥沼の中をにじるようなゆっくりとした挙動で関節を曲げてゆき、ようやく体を丸めるように低く身をかがめた。上から襲い来る爪を避け、必死に体を押し下げると、今度は手の平のように開かれた二本の足が目の前にあった。
間に合うかどうかは分からないが、この体勢で他の選択肢はない。地面に引っ張られる力に全体重を加え、背中も首も顔の筋肉も曲げられる所はすべて曲げ、ようやく二本の足の軌道を通りすぎたとき、シーノの悲鳴が元のように聞こえて、ロブロの頭の上を凄まじい勢いで猿が横切っていくのを感じた。
「……あああああっ！　ひゃあっ！」
その場に倒れ込んだロブロは、勢いあまって路地をごろごろと転がっていった。
猿の魔物は空中でくしゃっと丸くなると、手と足と尻尾を空中でぐるんと振り回し、こちらがわに振り返った。
四肢を伸ばしてずっと向こうの路地にはいつくばった。どうやら現実の世界では途轍もない速さが出ていたらしい、地面が何メートルにもわたってえぐられてゆき、白い粉塵が爪の間から放射状に舞い上がった。
「い、今、お前《ディーの眼》を使わなかったか？！」
目を回してうずくまっているロブロの耳に、シーノの驚嘆する声が聞こえた。
「《ディーの眼》だって！？」
「森の精霊（サテモ）みたいだったぞ！」
猿の魔物は攻撃が外れて猛り狂ったように牙をむいたが、狩人に予想外の動きを見せられて焦っているようにも見えた。

「くっ、こんな所に森の精霊（サテモ）がいたか！」
そう人の言葉を放ったような気がしたが、それがロブロの気のせいだったのかどうかは分からない。それ以上不用意な攻撃を仕掛けるつもりはなさそうだった。白い猿はそのまま表通りを駆け抜け、彼の前から真っ直ぐに退散していった。
呆然と座り込むロブロの周りに、夜の静寂が一気に降りて来た。心なしか体重が増えたような気がした。視界の隅でシーノの羽がぱたぱたと羽ばたいて、二人のまわりに降りてくる闇を振り払っていた。
「ロブロ、あれ何だったの？」
「さあ、まったく分からないな」
何から何まで謎だらけで、彼には答えようが無かった。

＊＊＊

隣町の自警団長モーリスは、正義感は強いが貧しい騎士の出の男である。ほとんど見栄だけで買い揃えた頑丈な鎧を装備しており、他の団員達よりも戦闘の知識が豊富で、魔物との戦闘にも慣れていそうであった。少なくとも、路地で死人の顔を確かめたときの彼は表情を一切かえなかった。
「ピリグリム魔器工房の、ロナウドだ」
周囲の団員たちは凄惨な光景から思わず顔をそむけた。モーリスは口元で何やら呟き、眠たげに開いていた男性のまぶたをそっと閉ざしてやった。
静かに立ち上がったモーリスは、静謐の中に見えない闘志を幾つも積み重ねているように見えた。鼻息を荒くし、ほうきのように切りそろえられた白い髭を一斉に波立たせた。
「諸君、もうじき朝がくる。今日はここで解散しよう、魔物の捜索は明日に持ち越しだ」
団員の一人が堪えかねたように言った。

「もう沢山だ、これだけの被害が出ているというのに、国王軍はまったく対処をしようとしない。いつまで反乱軍の鎮圧に取り掛かっているんだ！」
反乱軍はもともと民間人で結成された組織である、一旦活動を潜めてしまうと探し出す事が非常に困難となる。首謀者の出現するところに突如結成され、周囲の人々を巻き込んで肥大化してゆく。
この首謀者の尻尾がつかめない限り延々と繰り返されるいたちごっこに、現在百万人の国王軍の戦力は大部分が投入されており、残りは王城の警備をしている。夜の王都には警邏の姿も見えなかった。
ゼフスでは既に四半年もこの状態が続いていたのだ。戦争が長引けば長引くほど、また別の不安も頭をもたげてくる。
「おまけにもう何ヶ月も魔法障壁は閉ざされたままではないか。このままでは商売もできやしない！」
「なんとかならんのか、もう限界だ」
魔物に遭遇した事を隣町の自警団に報告したロブロは、ついでにサンシャインの自警団が満足な装備を取り揃えづらい状況にある事も相談しようかと思ったが、結局何も言わなかった。
モーリス以外の団員は分厚いトレンチコートにヘルメット、武器はボウガンか細身の棍棒といった装いで、ロブロとそれほど変わっていなかったのである。
それに加えて肌に感じられたのは、魔物を退散させてしまったというロブロの話にも眉根を寄せる、自分が彼らに歓迎されていない空気である。
商業地区であるシオの男たちはほとんどが商人か魔法使いで、傭兵を雇う余裕があれば喜んで雇っていただろうと思われる頼りなげな顔をしていた。どうやらロブロの話が疑わしいというより、狩人を上手く丸め込んだアイス＝ブルーム町長の狡猾さに嫌悪感を抱いていたのである。
「サンシャイン自警団団長殿」
老騎士モーリスは静かに彼に歩み寄ると、ロブロが持つ不思議な

力を探るようにじっと目を覗き込んだ。岩のような胸や丸太のような腕に触れ、そして成る程と頷いた。
「確かに、これなら魔物も恐れるはずだ。ありがとう、君のおかげで仲間を墓に葬ってやる事ができそうだ」
周囲の団員たちは、それしか出来ぬ自分たちの無力感を悔やむようにうなだれていた。

＊＊＊

本部に戻ったロブロはソファに仰向けになった。
目を閉じるとさきほどの魔物の赤い目や、血まみれの被害者の姿や、隣町の自警団の泣き顔が脳裏に浮かびそうだった。
ランタンの明かりはそのままにして、しばらく天井の味気ない模様を見詰めていた。
ボウガンは、魔物の噂を聞きつけたサンシャイン通りの武器屋が自警団に無償で提供してくれたものである。
ロブロの知らなかった事であったが、魔物による被害はどういう訳かサンシャイン通りのあるアイス＝ブルーム町が一番低いらしく、今回も隣町の住民が襲われていた事件にロブロが首を突っ込んだ形になっていた。
武器屋はこれもロブロのお陰だと思っているのだろうか。ボウガンを見ながら、知らないうちに彼はこの街の大きな期待を背負っていたことに気づいた。
いやいやながらやってきた仕事だったが、どうにか出来ないものかと本気で考えるようになっていた。
このまま街を護り続けられるかどうかはかなり危うい。あの不思議な力が都合よく出ていなければ、今頃無事では済まなかっただろう。あの力が出ていなければ、彼は戦闘も兵法もまるで素人の一般人、本来ならばそれが自警団というものだ。
ロブロは自分の左目を手で押さえたり離したりして、今も時間が

正常に流れている事を確認してみた。
あれは一体なんだったのだろう。周囲の時間がほとんど静止しているように見えた、あの不思議な感覚は。
窓辺の世界薬草を見やると、シーノは幼木の脇で真っ赤なチューリップに姿を変えて、花弁の中ですやすやと寝息を立てていた。
彼女は新月が近くなると、こうして花の中で数日間眠り続けるのだと言う。
幼木の方もシーノに寄りかかって、緩やかな寝息を立てるように枝葉を繰り返し膨らませていた。
彼の身の回りで、少しずつ何かが変わっている。目には見えなくとも、着実に確かに何かが変わりつつあった。
ロブロは夜が明けるまで、じっと天井を見詰めていた。シーノが長い眠りから目を覚ますまでに、なんとかしなくては。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2642z/

サンシャイン３１１

2011年12月11日14時45分発行